
魔法使いの始め方

三俣優哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いの始め方

【Nコード】

N4143P

【作者名】

三俣優哉

【あらすじ】

アルナス王国の王都、アルフィール。そこで滅多に仕事の入らない魔導士事務所を開くハルカ・ウェイアーズとアルト・フィリクス
の二人は日々を平穩に、そして退屈に過ごしていた。だが、ある日、妙に気品のある少女と騎士装束を纏った男が依頼主として現れて……。初めての連載なので至らぬ所もあるでしょうが、よろしく
お願いします。

アクセス12000、ユニークが3000を超えました！ありが

とっとうございます！

1月31日

312更新しました

3月13日

315更新しました

5月19日

エピソード更新しました

1-1 魔法使いの日常（前書き）

楽しんで頂ければ幸いです。

1-1 魔法使いの日常

午後二時を知らせる鐘が、活気に満ち溢れる王都に鳴り響いた。靴を鳴らす雑踏、大小様々な客引きの声、人々が行き交う喧騒、それらが世界から一時的に掻き消され、一つ一つの音が水面に広がる波紋のように融けていく。

しかし、それはあくまで一時的な事だ。

余韻を惜しむように鐘の音が消えれば、人がそこに生活する限り自然に創られる営みが街を包み込む、まるで時を刻むかのように。美しい少女はそれを事も無げに眺めると、瞳を閉じ、溜め息混じりに呟いた。

「暇ね……」

商工街と呼ばれる二番街道を見下ろす位置にある一室。

王都の住所録によれば、ウェイアーズ魔導士事務所となっているその部屋から窓越しに外を眺めていた少女は、突然糸が切れた人形のように、大量の書類が積まれた机に突っ伏した。

彼女の名はハルカ・ウェイアーズ。

魔法と呼ばれる技術を用い、人々から寄せられる様々な依頼を解決するウェイアーズ魔導士事務所の所長であり、全魔導士人口の内、僅か一割以下といわれる第一級魔導士だ。

黒を基調とした魔導士制服に身を包み、腰まである金色の髪を簡素なバレッタで纏めた彼女は、海のような瞳を呆れたように細めたまま、その視線の先にある青年を見つめて言った。

「そう思わない、アルト？」

「そつだな……それと、その台詞は三十二回目だ」

律儀に「暇だ」と言った回数を数えていた黒髪黒瞳の青年、アル

ト・フィリクスは、手元の書類に目を落としたまま気怠げに応じた。端正な彼の顔に若干疲労の色が見えるのは、諸事情で事務を担当する職員が休暇を取っている事に由来している。

つまり、この一見無愛想な青年は朝からこの書類、魔導士協会から半強制的に回された雑用と睨めっこを続けていたのだ。

暇である筈も、疲れていないはずもないのだが。

彼はあまりそれを表に出す性質ではなかった。

アルトは先ほどの鐘が午後二時を示していた事を思い出し。茶でも淹れようかと考えながら修正箇所ペンを走らせる。

「だって暇なものは暇なんだもの、それにこのままじゃ、ウェイアーズ魔導士事務所の名折れだわ」

机に突っ伏したまま憤慨するように言うハルカ、彼女に割り当てられた、山積みの書類を整理するという仕事は彼女の中では随分前に放り投げられているようだった。

「元々墮ちるような名声なんて無いだろう」

そして、ハルカとは対照的に、書類に目を落としたままペンを走らせ、気怠げに応じるアルト。

「うるさい、大体アルトがそんな無愛想な顔してるから」

「顔は関係無いだろ」

二人は不毛と呼ぶのも躊躇う様な言い争いを何度か繰り返すと、どちらとも無く黙り込み。部屋の一角、そこに掛けられている予定表に視線を向けた。

日付以外には何も書き込まれていないそれは、予定、つまり仕事が無いことを意味していて……。

「……最後に仕事したの何時だっけ？」

「確か……、一月前に猫探しをしたのが最後だな、報酬は五千テール」

「そっか……」

ハルカは諦めたように溜め息をつく、宣伝が足りないのかしら？そんな事を考えながらも一度窓の外に視線を向けた。

その時だった。

積み上げられた書類が宙を舞ったのは。

ハルカが書類の積まれた机を蹴り、まるで、見えない何かに弾かれたかの様に部屋を飛び出したのだ。

何が起きたのか……、本来そう思ふべき状況をアルトは見ると、
「またか……」

何故か特に慌てた様子も無く席を立つと「掃除が大変そうだ」と
呟き、ハルカの後を追うように部屋を後にする。

『ウェイアーズ魔導士事務所、諸事情により本日休業』

そう書かれたプレートが軽い音を立てて戸口に掛けられた。

1-2 魔法使いの日常

事務所に外付けされた階段を下り、雑然とした商工街の通りに出る。

昼夜を問わず、人々が忙しなく行き交う往来を横目に視線を巡らせると、目的の人物は直ぐに見つかった。

魔導士制服というのはただでさえ目立つ上に、本人は自覚しているかは知らないが、ハルカ自身が人目を惹く容姿をしている為でもある。

「一体何を見つけたんだ？」

アルトは人の流れを避けながらハルカの背に近づき、彼女が見ていたものを覗き込むと、一瞬、怪訝そうな顔をして言った。

「迷子か？」

「うん、お母さんとはぐれちゃったんだって」

アルトの問いにハルカは振り返らずに答えた。見れば、ハルカの前で少年が俯いているのが分かる。

泣いていたのだろう。

ハルカが声を掛けたおかげが大分落ち着き、嗚咽は収まってきたようだが、まだ顔を上げられ無いようだった。

「そうか」

アルトは呟くように言った。

実は、このように親とはぐれる少年というのは別段珍しいものではない。

ハルカ達が暮らす王都アルフィールは、只でさえ人口が多く、街を訪れる商人や観光客も多い。

その上、市街区を分けるように枝分かれした複雑な街路や、均整の取れた街並みによって構成される王都は、大人ですら時に方向感覚を狂わせ、王都を知らない人間が目的も無く街に入れば、ほぼ確

実に迷うとまで言われているからだ。

「この子ね、今日の夕方にはお母さんと一緒に王都を発つんだって」
ハル力は俯く少年を見つめながら、まるで自分の事の様に、憂いを含んだどこか優しい声で言つと、ゆっくりと手を伸ばし、

「うつ……うつ……え？」

少年の頭を撫でた。

母親のように、愛しいものを護るように。

少年はハル力に撫でられると、驚いたように体を震わせたが、すぐに安心したように伏せていた顔をゆっくりと上げた。

受け入れられたのだらう。

子供というのは本能的に自らを庇護してくれる人間を選ぶ、つまり、ハル力は少年のそれに適ったという事だ。

「で、お前はこの子の母親を探してあげたいと？」

アルトはそれを見て苦笑したような表情を浮かべてハル力に問う。
だが、あくまで問うただけだ、アルトはこの問いに意味があるとは微塵も思っていないかった、なぜなら、

「当然！人を幸せにするのが『魔法使い』の仕事だからね」

彼女は魔法使いだと誰よりも理解しているからだ。

ハル力は一瞬だけ振り返るとアルトに微笑み、少年の手を取る。

そして、太陽のように笑いながら言つた。

「大丈夫、私が絶対にお母さんを見つけてあげるから！」

ハル力の言葉に少年は微笑みを浮かべて頷いた。

1-3 魔法使いの日常

王都アルフィールは広い。

それは、今更確認するまでも無い事実だ。

中央大陸の中西部に位置するアルナス王国の首都である、アルフイールの総人口は約二十万人。

王城を中心に幾つもの街路や、均整の取れた街並みによって円を描くように広がる王都は、計算されて創られたモニュメントのようにも見える事と、長きに渡り諸外国に平和を訴え続けてきた初代アルナス国王、カイウエル・フォン・アルナスに敬意を表し、大陸平和の記念碑とも呼ばれ。

商人や観光客と言った活気を求める者達が集まり、常に総人口の二倍近い人間が滞在している。

それ故に、この街で一人の人間を探すというのは非常に困難、いや、何の力も持たない人間には、それこそ神の奇跡が味方をしない限り不可能な事だと言えた。

「さて、どう探すかな」

ハルカの「ひとまず落ち着いて話しの出来る場所に」という発案から、少年・クロアと名乗った - を連れて事務所に戻って来るなりアルトが言った。

ハルカ達の目的は広大な王都からクロアの母親を日暮れまでに探し出し、二人を再開させる事だが。

時計を見ると、日が落ちるまで後三時間程度しか時間は残されていなかった。

「そうね……」

ハル力はアルトの言葉に少し考えるような仕草をすると、頭の中から自分が使える魔法の一つを選び出し、躊躇無く空中に手を踊らせた。

空間刻印形式と呼ばれる魔法構築法だ、理を成す魔力を軌跡として幾重にも重ね、術式を完成させる、三大詠唱法の一つ。

ハル力は二秒と経たずに魔法を組み上げると、クロアに声を掛けた。

「クロア、どんな事でも良いからお母さんの事を教えて？」

「えっ？どんな事でも？」

クロアは首を傾げて不思議そうに言った。

「そう、どんな事でも、髪の毛の色や瞳の色、背が高いのか？低いのか？何でも」

「……うん、分かった」

クロアは戸惑ったようだが、ハル力に言われた通りに一つずつ、母親の事を話し始めた。

夕日みたいに赤い髪をしている事。

夜空みたいに綺麗な黒い瞳をしている事。

自分より頭2個分も背が高い事。

クロアは楽しそうに話した、次第に母親の自慢になっていくそれを、ハル力は嬉しそうに聞きながら、術式を書き加えていく、そして。

「うん、コレでいいかな」

宙に浮く光の術式を見ながらハル力は満足気に頷いた。

「これは……探査魔法か」

「うん、クロアのお母さんの情報を出来うる限り入力したから、恐らく誤作動は起きない筈だよ、まあ、詰め込みすぎて範囲がちよっと小さくなっちゃったけど……」

覗き込むアルトに、ハル力は照れたように返した。

ハル力の正面で輝く、光で構成された術式。

探査魔法と呼ばれるそれは、術式に入力された情報を元に、探査

領域内に入った物質を判別する魔法だ。

本来は鉱脈や水脈と言った資源を確認する為に作られたものだが、何かを探し出すといった点では、正しい使い方をしていると見えるだろう。

「で、範囲が狭まったって言ったがどの位だ？」

アルトがそう聞くと。

「えっ！？……その……」

ハル力は目に見えて狼狽し、決まりが悪そうに口を動かすと、本当に小さく言った。

「半径……十五メートル位……？」

「構成し直せ」

一刀両断。

円周上に回るだけで五時間以上もかかる街を半径十五メートルの範囲で探す。

はつきり言って無謀だ。

「だ……だってこれ以上精度を下げたら誤作動で探すどころじゃないの！ほら、時間ないんだからいくよ！クロアも！」

「あ、はい！」

ハル力は誤魔化すようにまくし立てると、魔法結晶に術式を封じ込めてポケットに放り込み、クロアの手を引いて部屋を飛び出した。

窓の外では日が西の空に傾き始めていた。

1-4 魔法使いの日常（前書き）

第一章やっと完結です。

1-4 魔法使いの日常

事務所を出てから三人は人通りの多い場所を重点的に移動した。探査魔法でクロアの母親を捜しながら、行く先々で聞き込みをするといった作業を繰り返したが、結局成果の出ないまま一時間が経過しようとした頃。

「何でお姉さんは魔法使いなの？」

ハル力と手を繋いでいたクロアは不意に立ち止まりそんな事を聞いた。

「ん、どうしたの急に？」

「教えてほしい」

クロアは単に純粋な好奇心で聞いているようだった。

魔法が教育課程に組み込まれた現在。たとえ子供であつたとしても魔法に関して一定以上の知識を持っている。

一般的なそれによれば魔法を扱う人間は、魔を導く者であり、魔導士と定義される技術者であるとされる。

しかし、魔法使いというのはそれとは違う、杖の一振り、呪文の一言で奇跡のような事象を起こす者を表す言葉だ。

それ故に、人は魔法使いになる事は出来ない。

そう決まっていた。

だからクロアは疑問に思つたのかもしれない。

ハル力が魔法使いと名乗る事に。

「そうだなあ、私を助けてくれた人が魔法使いって名乗ったから、かな」

ハル力はクロアの問いに茶化すように、だがどこもなく真剣な表情で答えた。

「あの人を人を幸せにする魔法使いだって言つたから、私もああなりたいって思つたの、ほら、私って単純だから」

ハル力は笑いながらそう言うと、繋いだ手を少しだけ強く握った。

「お姉さんは、だから魔法使いに成りたいの？」

「うん、あの人に負けないような魔法使いにね」

ハル力は快活に答えると、

「さあ、行こっか！」

「うん」

クロアの手を引いて歩き出した。

日が落ちる前に、彼の母親を見つける。

「絶対に……」

誰にも聞こえないように呟いたハル力の言葉。

それにアルトは顔をしかめると、何も言わずに二人の背中を追いつづけた。

「……」

どれくらい歩いただろうか？

ハル力は焦燥感と、それから来る疲労に苛まれながら、そんな事を思った。

あれから、王都中の人が集まりそうな場所、商店街や酒場、といった場所を休む事無く回った。

随分時間が経った筈だ。

刻限はもう、すぐそこに迫っていた。

クロアをお母さんに会わせるって約束……したのに……。

ハル力は力無く、顔を上げ、茜色に染まってゆく空を見上げる。鐘が夕暮れの空に鳴り響いた。

アルトが取り出した懐中時計が示す時間は午後五時。

今の時期だと後三十分程で日は地平線の下に沈む。

「お姉さん……」

クロアは不安そうにハル力を見上げた。

しかし、ハル力は答えない。

茫然と空を見上げたまま。

（このまま、終わるの？）

固く、拳を握り締めて。

（そんなの……）

「ハル力！」

「！」

気づくと、ハル力はアルトに掴みかかれていた。

衝動的にハル力に向き合い、呼びかけた彼の顔に、いつもの気怠げな色は見えなかった。

そこには、ハル力の瞳には、自分に本気で向き合う青年が映っていた。

「諦めるのか？本当に、こんな終わらせ方で良いのか？」

アルトは言い聞かせるように言った。

分かっている、彼は正しい。

諦めてる私はそう思う。

私だってこんな終わり方なんて望んでない。

こんな終わり、望む筈が無い。

だから。

「良い訳無いでしょ！！」

ハル力は次の瞬間、零れそうになった涙を払い、叫んだ。

往來の人間の何人かが振り返るのが見えたが、そんな事は既にどうでも良い。

今は目の前のコイツと話をつけなくちゃいけない。

ハル力は言葉を出そうとした、

それなのに……。

「なら、どんな結果になろうと最後まで足掻いてみるよ『魔法使い』」

「！」

先に言われてしまった、笑顔で、魔法使いって。

私が言おうと思ったのに。

悔しかった。

だから、ハル力は最後の抵抗とばかりに叫んだ。

「言われなくなつて……！望まれなくなつて！ハッピーエンドに見せるよ！！私は魔法使いなんだから！！」

「お姉さん……」

「……ごめんね、弱気になつてたみたい……けど、もう大丈夫！」

ハル力は微笑み、振り返ると空間に光の軌跡を走らせる。

「遠慮なんてしない！必ずクロアをお母さんに合わせてあげる！」

軌跡が理を支配し、理を変革させ、ただ一つの事象を生み出す、人が魔法と呼ぶそれを。

「我、汝が傍らに在る者、今重力の鎖を解き放ち、汝が腕に抱かれん！」

『レヒテーション
浮遊魔術』

音と式。二つが解け合い、理は魔法を生み出した。

それと同時に、強烈な風が吹き荒れる。

クロアはそれに耐えきれず、思わず目を閉じた、浮遊感、良く分からない感覚に体を支配されながらも、自分の右手に誰かの温もりを感じて、恐る恐る目を開いた、

――すると。

そこには一面に夕暮れの空が広がっていた、眼下には先程まで立っていた筈の王都が見える。

「僕、空飛んで……！」

クロアは思わず叫び出しそうになるのをこらえ、右手の温もりに、そこで笑うハルカに視線を向けた。

「大丈夫、落ちたりしないから」

ハルカは笑いながらそう言うと、自分達を包むように広がっているものとは違う、もう一つ術式を構築し、完成させた。

「それ……は？」

クロアが震える声で聞く。

落ちないとは言われたが、やはり恐怖はそう簡単拭えるものではないようだった。

「拡声魔法、術式を通した声を自らの視界に映る全てに伝える魔法、ごめんね、王都全体を視界に収めるにはこれしか思いつかなかったから」

ハルカはもう一度微笑むと、目を閉じ、最高の笑顔を浮かべて言った。

「お母さんの事を呼んで！クロア！」

王都の空に一人の少年と少女の声が響き渡った。

「ったく……余計な事したかもな」

アルトは一人苦笑を浮かべて毒づいた。

王都全体に無許可で声を広げたのだ、始末書や雑用の手伝い程度では済まないかもしれない。

だが、アルトは笑った。

後悔なんてものはアイツに出逢った時から失って久しいしな……。
「ま……そんな奴だから安月給でも一緒にいられるのかもしれない
が」

声の余韻にざわめき立つ街を見ながら、アルトは明日の朝一番に
魔導士協会からの小言を言いに来るであろう人間をどうやってかわ
すかを考え始めた。

クロアの母親は拡声魔法で指定した場所にすぐに現れた。

街中を走り回って必死にクロアを捜していたのだらう、赤い髪と
装飾の多い衣服は乱れ、ひどい有り様だった。

しかし、クロアを見つけた時に見せた笑顔は、そのまま絵に描か
れたとしても価値ある物に成っただらう。

「本当にありがとうございます！」

「いえ、私はそんな……」

クロアの母親はハルカが戸惑ってしまっくらいに何度も頭を下げ
て礼を言つと、クロアとしっかりと手を繋ぎ、夕暮れの街へと歩い
ていった。

「良かったな」

「うん」

「結局、報酬は貰え無い慈善事業だった訳だけどな」

「ううん、ちゃんと貰ったよ」

「え？」

『ありがとう魔法使いのお姉さん！』

「うん、ちゃんと貰った」

アルトの言葉にハルカは満足げに頷いた。

つまらない口論は必要無い。

魔導士協会の厄介事も話す必要は無い。

今はただこの余韻に浸りたい二人はそう思った。

2-1 はた迷惑な依頼人

「営業停止処分？」

クロアが母親と再会し、王都から発った次の日。

ハルカは事務所に届けられた書簡の内容を読み上げたアルトに確認するように言った。

「そう書いてあるな」

昨日の時点・魔導士法で規制されている大規模魔法を無許可で使った・でこうなる事はある程度予想が出来ていた。

その為か、アルトは普段とあまり変わった様子を見せる事は無く、終始落ち着いた様子を見せていた。まあ、例えばこれが彼にとって予想外の事態であったとしても、彼は大抵の事で驚いたり、狼狽したりはしないのだから結果は変わらなかっただろうが。

「どうしよう？」

ハルカはそれにうわ事のように呟く。

「今更だな……まあ、普段から開いてるのか閉まっているのか分からないような事務所だしな、それに営業停止と言ってもたかが一週間だ、一応アレクに感謝しとけよ」

営業停止を伝える書簡が届いたのは今朝だった。

本来は魔導士協会直属の配達員が各事務所に報告書や、書簡の類を届ける事になっているのだが、ウェイアーズ魔導士事務所では違う。

ハルカの友人であり、協会の事務員であるアレクが、世話焼き女房よろしく、報告や厄介事が起きる度に出向いて来るからだ。

これ以上事件を起こされると迷惑だから、と言っていたが、彼が事務所に来る目的の八割は、所長と書かれたプレートに乗った机で思案する少女だと言うことをアルトは知っていた。

「今度、夕飯でもご馳走しようかな？」

「アイツなら飛んで喜ぶだろうよ」

アレクが顔を真っ赤にして何事かをハルカに伝えようとする場面
を想像しながら、アルトは溜め息をついた。

概ね何時もと変わらないやり取り、ただ違うのはこれから一週間は
仕事が入らないという事のみ。

実際、一週間後も仕事が入るかどうか怪しいのだが。

「さて、一週間どうするかな……」

「あ、それならルミリア劇場に行かない？今面白い演目がやってて」

「どうせ魔法使いモノだろ……」

どんなに断ろうと、無理に彼女は自分を連れて行こうとするだろ
う。

アルトは気怠げに答えると、

「噂をすれば影だな」

不意に言った。

「え？」

「遅くなりましたあ！」

次の瞬間、事務所の扉が何かに叩き付けられたかのように開かれ
る。

小麦色の肌に銀色の髪、動きやすそうな衣服に身を包んだ少女が
快活な笑みを浮かべて其処に立っていた。

「ごめんね！昨日休み貰ったのに今日まで遅れちゃって」

ウェイアーズ魔導士事務所の事務作業担当、アリス・ルミリアは
笑いながらそう言った。

王都最大の演劇集団、ルミリア劇団の娘である彼女は、ハルカの
幼なじみであり、その縁から劇団の練習時間の合間や休みの日に事
務所に働きにきていた。

「それは気にしない約束でしょ、それよりアリス？今やってる舞台
のチケットって無い？」

「ん？ルファールのやつ？それなら確か一週間後のが……」
「なあ」

「はい？」

盛り上がる二人にアルトは扉の方を指さして言った。

「さっきからお前の後ろにいるのは誰だ？」

「……」

其処には二人の男女が扉の前で何やら思案顔でこちらを伺っているのが見えた。

「あつ！ごめんなさい！ハルカに会ったのが嬉しくて、すっかり忘れてました」

「おいおい……」

アルトはすっかり呆れ顔だ。

いなかっただけで疲れるが、
いても精神的に疲れるな。

彼の気苦労が耐えないのはこのせいかも知れない。

「何でも、事務所に依頼がしたいそうなので、此処までお連れしたのですが」

事務員の顔になったアリスがアルトに答えた。

普段は快活な少女だが未熟でも女優、空気に合わせ、自らの性質を変化させるのは得意らしい。

ハルカはそれを聞くと興奮気味に席を立ち、嬉しそうに声を上げる。

「本当？本当に依頼！？1ヶ月ぶりの！？」

「落ち着け、その事何だがアリス、今うちの事務所は……」

「営業停止中だと言うのでしょうか？」

アルトが事情を説明しようとした瞬間、唐突に扉の方から澄んだ声が割り込んだ。

先程アリスが依頼人だと紹介した二人、その内の少女が得意気に事務所の中に足を踏み入れる。

美しい少女だ。

プラチナブロンドの髪に、きめ細かな白い肌、自信に満ちる緑玉石のような瞳。

誰が見ても美しいと評するだろう。

それに、思わずアルトは目を細めた。

営業停止の通達が来たのは今朝だ、幾ら昨日の魔法を知っていても、魔導士協会の書類は基本機密扱いとされる。

カマをかけられたか？アルトはそう考えるがすぐに放棄する、大規模な事務所なら体裁が崩れ、信用を失うのは死活問題だが、こんな月に一人も訪れない事務所を強請ろうという人間は居まい、特にこのような少女は。

ここは……、

「……どこで聞いたかは知りませんがその通りです。恐縮ですが依頼は」

「受けられ無いと？」

「その通りです」

魔導士協会に背けば流石に面倒は避けられ無い。
断るのが無難だ。

「残念ですが、お引きとり……」

「ちよつ！待つて！せつかく来てくれたのに！」

「運が悪かったんだよ、主に此方のな」

アルトは留めようとするハル力を制する、これ以上長引くと面倒だ。

そう思い始めた頃。

「心配は無用だ」

少女の後ろに控えていた男が言った。

厳格、そんな一語を連想させる男だ。

見るからに上等な衣服、単に生地や装飾が良いのでは無い。

機能性に優れ、その中で様式美が損なわれていない、ある種の戦闘服を連想されるデザインの衣服を身に纏った男は、腰にさしてある剣に手を掛けた。

「一週間の営業停止は姫様の為に魔導士協会に掛け合ったものだ、君らに拒否権は無い」

「掛け合った？その娘がリークスフィア・フォン・アルナスとでも言うのか？」

「そうだ」

男は頷いた。

リークスフィア・フォン・アルナス。

現国王ルードウス・フォン・アルナスの娘、若干十三歳にして既に優秀な外交手腕を発揮するアルナス美貌の第一王女。

この国で知らない者は居ないほどの有名人だ。

「なら……、仮にその娘が王女だとして何でここに？」

最もな疑問。

それに男は言った。

「彼女を守って貰いたい」

「それは近衛騎士の仕事だ、俺達は魔導士であって騎士じゃない」

「相手が魔法使いを名乗っているのかもか？」

「！」

ハルカが机を揺らした。

魔法使い、あらゆる奇跡を起こす者。

仮に魔導士がそう名乗っていたとしてもそれが脅威である事に変わりはない。

魔法は戦闘の技術として優秀すぎるからだ。

絶対数の少ない魔導士、当然それを犯罪に使うと考える者もいる、誰もが正しく技術を用いるというのは有り得ない。

「王宮勤めの魔導士が居るだろ？」

「彼らでは駄目だ、少なくとも第一級魔導士でなければな」

第一級魔導士、魔導士人口の中で一割以下の人間。

ハルカはそれを聞くと表情を浮かべずに問う。

「……つまり、これは国からの依頼、そうですね？」

「そうだ」

ハルカは確認するように思案すると。

「ならば、この依頼、お請けしましょう」

「助かる、詳細は……」

男は社交事例のように礼を言うと、今回の依頼について話し出した。

212 はた迷惑な依頼人

男はジークと名乗ると、今回の依頼について一通りの事を話した。

大まかな内容はこうだ。

事の始まりは三日前。

王宮の、それもリークスフィアの私室の前に置かれた一通の手紙。差出人の欄にルフアール・エル・シエルと書かれたそれには、リークスフィアを十日後に誘拐すると、そう記されていた。

王宮に誰にも気付かれずに侵入し、手紙を残し、去る。

本来不可能な筈のそれが起きた結果、当然王宮は混乱した。

結果、内部に犯人が居る可能性や、十分な指揮を取る事が出来るかを懸念し。

外の魔導士にリークスフィアの保護を依頼するという結論に至る。幾つかの魔導士事務所を候補に吟味をしていた所、偶然にもウェイアーズ魔導士事務所が営業停止となった事を知り。裏を搔くという判断から依頼を任せようと赴いた。

「……という訳だ」

「なる程」

話を全て聞き終わると、椅子に腰掛けたまま、アルトは言った。

「君達には生活の面も含めて、今から一週間の間、姫様を保護して貰いたい」

ジークは今まで変化する事の無かった表情を少しだけ歪めた。不安、そんな色が見て取れる。

身分が証明されているとは言え、自らの主を見知らぬ人間に託す

のだ、不安にならない筈が無いだろう。

「分かりました、姫様は私達が責任を持ってお守りします」

ハルカはそれを気取り、明るく、不安をかき消すように言った。

「感謝する」

「感謝されます」

茶化すような声、それにジークは少し安堵のしたように、ハルカに背を向けるとリークスフィアに向き直った。

「姫様」

「ジーク、まだ暗い顔をしてる」

「そう、でしょうか……」

「ええ」

姫様の前で、不甲斐ない。

リークスフィアの言葉に、ジークは表情を曇らせた。

「でも大丈夫、心配は無用だわ」

「ですが……！」

「私が言うのだから」

リークスフィアは軽くウィンクをして笑う。

彼女はこういう人だ。

ジークはそれに一瞬目を奪われ、俯くと、微笑んだ。

「そうですね、姫様がそう仰るなら、きっと」

「勿論よ」

ジークはその後リークスフィアと二言三言話すと、事務所の扉の前で振り返り。

「姫様を頼む」

そう言っ、商工街の人混みに消えていった。

ハルカはジークが視界から消えるまで見送ると、リークスフィアを覗き込む。

「それじゃあ、リークスフィア様、中に入りましょうか？決める事もありますし」

「リア・フィーレル」

「え？」

「私を呼ぶ時はそう呼んで、その代わり、私もハルカと呼ぶから」
リークスフィア、いや、リアは悪戯っぽくハルカに笑いかけた。

「うん、リア！」

「宜しい」

二人は笑いあうと事務所の中へと入った。

213 はた迷惑な依頼人（前書き）

少し軽くなります

2-1-3 はた迷惑な依頼人

二人は事務所の中に入ると、ハルカが言っていた「決めなくてはいけない事」をアルトとアリスを交えて話した。

とは言っても、事務所の構造や、外に出る時は必ず誰かが付き添う、と言った基本的な事ばかりで、三十分も経つ頃には大体の事に目処が立っていた。

「じゃあ、リアは私と一緒に事務所に泊まるって事でいいよね？」

「ええ、それで構わないわ」

「私の所でも良かったのに」

「アリスは魔導士じゃないでしょ」

ハルカはアルトが淹れた紅茶を飲みながら、リアが一週間の間、どこに泊まるかを決め終わると満足げに軽く息を吐く。

そして、対照的にアルトはそれを見ると、溜め息をついた。

「これで、決める事は大体決めたのか？」

アルトは半眼で楽しそうに談笑するリアとハルカ、そして茶化すアリスを見て、何時も以上に疲れたのか、彼の周りの空気が重いと言った。

余談だが、女性ばかりの空間でアルトが男である事を恨んだのはコレが初めてだった。

「うん、後は買い物かな」

「買い物？」

「リアが王女だって事を偽装しなくちゃいけなかったから、私物が殆ど無いからね」

事もなげに言うハルカ。

確かにリアの私物はジークが置いていった肩掛けの鞆が一つだけだった。

それにアルトは怪訝そうに表情を歪めると、

「参考までに聞くぞ……何を買っただ？」

彼の額を汗が一筋流れた。

「ん？取り敢えず、服とか下着……」

「帰る」

アルトはハルカが言い切る前に椅子から立ち上がると踵を返し扉に向かった。

「え、ちょっと！」

ハルカは慌てアルトの腕を掴む。

「止めるな！俺の事は良いから先に行け！」

「何で！？置いて行ってるのそっちだよ！？恥ずかしいの？大人なのに？」

「大人だからだ！」

アルトは必死にハルカを振り払おうとする。

女性の買物に付き合っているのは苦手だ。

待つのが苦手なのでは無い。

あの空気が苦手なんだ。

前に勘違いで憲兵に捕まりそうになった事を思い出し、心の中で言い訳がましく呟きながら、現実でも言い訳を並べる。

「俺が居なくても大丈夫だろ！」

「駄目だよ！」

「駄目です」

「駄目ね」

見事な三重奏。

その後、ハルカと、加勢したアリスとリアを相手に粘るが……。

三十分後。

「……分かったよ、店の前で待ってるから」

「約束だよ、勝手にどこか行ったらダメだよ！」

「アルトさん！もし居なかったらデザート奢りです、あれ？居ない方が良いかも？」

「アルト、魔導士として私に忠義を尽くしなさい」

「はいはい……」

結局根負けしてしまった。

苦労人、彼を適切に表す言葉はこれだろう。

初対面のリアにも良いように扱われるとは、俺一体何なんだ？

アルトは部屋を楽しそうに出て行く彼女達を追いながら、そんな事を考えた。

一般的に、王都で買い物をするというのなら商工街か市場が定番とされている。

大抵の物はこの二カ所で揃う上に、平和の記念碑と呼ばれるこの王都では品も良く、商人に限らず総じて人柄が良い、つまり多くの場合で値引き交渉が効きやすいという利点もある。

ただ、もう少し上等な物が欲しいなら王都の中心に近い第一街区の高級店に足を延ばす、これがアルフィールで暮らす人間の一般的な認識だ。

今回の場合は。

「事務所の窓から見える範囲で事足りる……か」

「気が削がれるような事言わない」

四人は事務所を出ると、文字通り窓から見える商工街に降り立ち、周囲を見渡していた。

「でも、大抵の物は此处で揃うよね」

「それはそうだけど……折角リアもいるんだし、もっと楽しく買い物したいでしょ？」

アリスの言葉にハル力は頬を膨らませる。

身分を隠すため、一般的に見て不自然な態度を取らない。

そう決めてはいたが、ハル力は既に演技では無く、出会って数時

間もないリアと、友達のように付き合っていた。

ハルカの強さ、人を惹きつける力だ。

一週間、ハルカはリアの友達として過ごそうと、依頼を受けた瞬間からそう考えていた、だから……。

「もう楽しんでるみたいだけど」

「え？」

「ほら、そこ」

アリスが指差した先、煌びやかな水晶や、幸せになれると押し売りに囁かれそうな壺、インクが滲んで題名すら読めないような本、それらが古ぼけた絨毯の上に置かれた、見るからに怪しげな露天。

リアは瞳を輝かせそれらを眺めていた。

「こういうのに興味があるのか？」

アルトはリアに近づくと言った。

リアは振り向かないまま頷く。

「うん、本とは違う全て、こういうのは本当に見て、初めて頭じゃなくて心に焼き付くから」

「そうか」

アルトは露天商の前に腰を下ろし、適当に商品を見回す。すると、

「あ」

「どうした？」

唐突にリアが声を上げて、絨毯の上に置かれた丸い水晶の一つを拾い上げる。

「魔法結晶か」

アルトはリアが手に乗せる水晶を見ながら言った。

本来水晶というのは石英が結晶化した物だ、紫水晶などは微量の鉄イオンが混入する事によってその色を成す。

魔法結晶と言うのは、石英が結晶化する際に周囲の魔力の影響を受け、魔法、魔力に対する伝導性を獲得した物を言う。

これに封印式を刻む事によって魔法を保存する媒体となり、魔導

士以外の人間でも使い捨ての魔法が使えるようになるというものだ。尚、同じ質量でも普通の相場だと、装飾に用いられる水晶の四、五倍の値がつくとされている。

魔法に用いられる物は総じて高額だ。

「初めて見た」

「ま、確かに魔導士以外だと、あまりお目にかかる機会は無いだろ
うな、ハルカは支給品のやつを何個も持ってたが……」

アルトはそう言いながらリアに目をやると、不意に嘆息したように露天商に向き直り。

「……親父、いくらだ？」

「二万テール」

露天商はアルトを見てニヤニヤと口元を歪めた。
足元を見られている、普通の人間なら呆れて踵を返すところだが、

「高いな」

「これは正規の値段でして」

「これがか？」

「ええ」

露天商のその言葉に、アルトは目を細めた。

「刻印が無いな、正規のモノには全て識別番号が刻まれている筈だ」

「な……！何の言い掛かりを！」

アルトの言葉に露天商は目に見えて狼狽した。

アルトはさらに追い討ちをかけるように。

「魔導士って言えば分かるか？」

「！？」

これで締めだ。

「二度は言わないぞ、この場は見逃してやる、五百だ」

「っ……！」

アルトは、露天商が力無く頷くのを見ると、五百テール硬貨を露天商に放り、リアの水晶を取り上げる、そして、

「商談成立だ」

勝ち誇った笑みを浮かべた。

「アルト！」

露天から離れると、ハルカは大声でアルトを呼びつけた。

「何だ？」

アルトは半眼。

「今みたいのは！」

「私達の領域じゃない、だろ、今の露天商は知らなかったみたいだが、魔導士は捜査権や逮捕権を持たないからな」

「だったら！」

アルトはハルカの言葉に溜め息をつく。

「だから商談だったの、脅しでも強請ゆすりでもない、それに……」

アルトは魔法結晶をリアに手渡した。

「心に焼き付ける思い出だけじゃなくて、形のある思い出が一個位あっても良いだろ」

自分らしくない。

そう思った、似合わないと思う。

だが、同時にそう出来る自分を誇らしくも思える。

「……ありがとう」

リアは魔法結晶を胸に抱くと、微笑んでアルトを見上げ、そう言った。

「どう致しまして、まだ買い物があるんだ、さっさと済ませるぞ」

アルトはそう言うと、無愛想に商工街を歩いていく。

「私が悪者みたい……」

「そういう時もあるよ」

ハルカとアリスはアルトが行く方向に歩き出す。

日はまだ高いままだ。

214 はた迷惑な依頼人（前書き）

悩みました。感想とかをくれると嬉しいです。

214 はた迷惑な依頼人

アルトが露天商から魔法結晶を値切った後、四人は目に付く場所を適当に周っていった。

女性陣は騒がしく、無計画に、そして気が赴くままに商工街を周り、気付けば、後で買えば良い筈の食材や、生活必需品をも大量に買い込み。昼食を取ろうと、以前アルトが友人に教えられた食堂に入った頃には、彼の両手は大量の買い物袋で占有されていた。

一体何キロあるんだ？

アルトは騒がしい店内の隙間を縫うように移動すると、空いている席に着くなり、異常に重い買い物袋を床に下ろし、溜め息をついた。

「さすがに……買いすぎじゃないか？」

溜め息の回数を気にしながら、アルトは自分以外の三人をぼんやりと見回す。

左手にアリス、対面にハルカ、右手にリア、彼女達は特に気にした風も無くメニューに目を落とし、何を注文するかを笑いながら話していた。

それを見ると、何故か自分が馬鹿馬鹿しく思えて、もう一度溜め息をつく。

本当に何回目だ？

ハルカはそれに気付くと、顔を上げ、

「アルト、幸せが逃げるよ？」

「誰のせいだよ」

「誰のせいだろうね？ほーら、早く注文して？私達はもう決めたよ」半眼で返すアルトに、ハルカは嬉しそうに言った。

アルトはそんなハルカを見て不意に、そう言えば二人一緒に買い物に出たのはいつ以来だろうか？そんな事を思う。

三ヶ月……いや、半年位か？

だが、過去を振り返るにしても、今手元にあるのはアルバムではなく、食堂のメニューだ。

アルトは手早く決めるために、特に考えずにメニューの一番上に書かれたオススメを頼む事にした。

「……おばちゃんの気まぐれ日替わり定食」

なんて優柔不断なメニューだ。

「はい！定食入りまゝす！」

アルトがぼんやりとそんな事を思うと、彼の声を近くに居た男性店員の一人が拾い上げた。

活発そうな店員は笑顔でこちらに寄ってくると、ハル力達の注文を手際良く聞いて厨房へと駆けていく。

アルトはその後ろ姿を見送った。

五分程経っただろうか？

アルトは相も変わらぬ女性陣の談笑を眺めていた。

暫くの間は会話の内容を把握していたのだが、流石に自分にはついて行けない話題となると、頭で認識する事も面倒になり、今ではぼんやりと眺めるだけだ。

アルトは早く昼食が来てくれる事を祈りながら、不意に、細かな銀細工が施された懐中時計を取り出した。

一目見ただけで分かる程の値打ち物。

装飾を手で弄び、時間を確認しようとは何気なく目を落とす、するといつの間にかこちらを向いていたリアと目があった。

「何だ？」

「その時計どうしたのかしら？と思って」

「直球だな」

「周りくどいよりは良いんじゃないかしら？」

「まあな……」

答えに一番困る聞き方でもあるが。

彼は知的好奇心に満ちたリアの瞳から目を逸らすと、逡巡するように当てもなく視線を巡らせ、事も無げに、

「……貰った」

そう言った。

「誰に？」

リアは素っ気ない答えを聞くと、更に好奇心を掻き立てられたのか瞳を輝かせる。

「ハルカにだ」

「ふーん」

「何だ……その目は」

「別に、何でもないわ」

ニヤニヤと笑うリア、それにアルトは憮然とした顔で、

「言うておくが、別にお前が考えているような物じゃない、これは、ハルカと事務所を立ち上げた時に記念で作ったんだ」

「それじゃあ、ハルカも同じ物を？」

「うん、持ってるよ」

ハルカは鎖を引き、銀色の懐中時計を取り出すとリアに手渡す。

「綺麗……」

テーブル越しに覗き込んだアリスが息を漏らす。

「本当に、それにこれ、リクフィリア製ね」

リアも感心したように銀細工に触れる、見ると、時計の淵に小さく刻印が刻まれているのが分かった。

リクフィリア、伝説の時計職人の名を継ぐ者。

年に数個しか作られない事もあるそれは、時計としての価値だけでなく、宝石、芸術品としての価値も持ち、博物館に飾られていてもおかしくないような物だ。

最近だと、一千万テール以上の値がついた物もあった。

「これなら、冗談抜きにしても百万テール位するかも」

「そんなに高い物なの？」

「ええ、確か百五十万テール位だったと思う」

リアは思い出すように言った。

確か、以前どこかの貴族が、リクフィルアの懐中時計を自慢していた。

「でも、それって幾ら記念でも行き過ぎているんじゃない？」

アリスはそれに怪訝そうに聞いた。

それはそうだ、伝説の時計職人、彼に時計作りを依頼する人間はそれこそ、貴族や富豪といった類だ、こう言ってはなんだが、小規模事務所を相手にするとは到底思えなかった。

「まあ、普通はな」

「うん、普通はね」

「？」

声を揃える二人にアリスは首を傾げた。

「つまり、普通じゃなかったって事でしょ？」

リアは悟ったように笑顔を浮かべた。

「まあな」

「そっか」

アルトの同意を聞くとリアは満足げに頷く。

リクフィルア、彼は気が乗らない時は誰に対しても時計を作る事は無いらしい。

だが、もし彼が本当に認めて作った時計には。

（特別な紋が刻まれている）

リアは時計の感触を思い出す、今まで見た時計には無かった、一文、

『ありがとう』

丁寧に刻まれたその一語を。

「お待たせしました」

丁度その時、昼食が運ばれてきた。

「さ、冷めないうちに食べましょ」

リアはそう言つと手を合わせ自分が頼んだサンドイッチに手を伸ばした。

ウェイアーズ魔導士事務所。

それを営む二人の過去に、少しだけ触れた気がした

215 はた迷惑な依頼人

「疲れたー」

事務所の扉を開くなり、ハルカは間延びした声を上げ、来客用のソファーに座り込んだ。

しかも、上着のボタンを外し脱ぎ捨てるとそのまま横になり、幸せそうな顔をして口元を歪めた。

余程買物が楽しかったのだろう。

……何となく腹立たしい。

アルトはそう思いながら出来る限りの皮肉を込めて言ってやる。

「ああ、本当に疲れたな……主に俺が」

アルトは全く聞く耳を持たないハルカにそう言いながら、昼食後の買い物で更に膨れ上がった荷物をテーブルの上に置いた。

その瞬間、

ミシッ……！奇妙な音を立ててテーブルが軋んだ。

「……」

本当に何キロあるんだ？

何度したか分からない問いを頭の片隅でしながら、アリスとリアを事務所の中に入れると。アルトは台所に行き、紅茶と、アレクが貰いものだと言って持ってきたクッキーを並べた。

「気が利くのね？」

「職業病かもしれないけどな」

アルトはリアの言葉に気怠げに答える。

今まで生活してきて、自分で良いと思えた試しがなかったからだ。

「良く気付く男性はモテるわよ」

「俺はモテた試しがない」

「そうなの？」

心底以外そうに言うリア。

アルトは着飾った貴族を見慣れているリアからしても端正な顔立ちをしていた、その為、異性との交流は盛んだろうと思っていたのだ。

「ああ、もしそうじゃなかったら、俺は今こんな所にはいないと思うが？」

「……そうかもね」

リアはアルトの言葉を聞くと一瞬黙り込んだが、すぐにそう言うて微笑み、白いティーカップに口を付けた。

優しい紅茶の香りが広がった。

美味しい。それ程高い茶葉を使っている訳では無いのだろうが、純粹にそう感じた。

アルト自身あまり良く思っていない様だが、コレは立派な技術だと、リアは思う。

彼は生き方を変えれば、無限の世界を見れるのだろう。

その気怠げな瞳で。

いや、殆どの人がそうだ、人はありようによって見る世界を変える事ができる、万華鏡のように。

廻って、廻って、廻って。

違う何かを。でも、私は、リークスフィア・フォン・アルナスは、例え自身が変わったとしても。

「……変えられない」

リアは小さく呟いた。

誰にも聞こえないように。

誰にも……気付かれぬように。

アリスがハルカと話す声が聞こえた。

アルトの溜め息混じりの声が聞こえた。

私の声は……聞こえない。

これで良い。

これで……良い。

夕暮れの光が紅茶をより紅く染めた。

彼女の蒼い瞳はそれを写す。

そして、その彼女を誰かが瞳に写していた。

215 はた迷惑な依頼人（後書き）

話しの流れを補完しました。迷惑を掛けてすみません

216 はた迷惑な依頼人（前書き）

すみません、なんか纏まりませんでした。感想とか待ってます。

216 はた迷惑な依頼人

『魔法は万能では無い』

これは、魔法を学ぶ者が一番始めに聞くことになる言葉だ。

魔法に夢を抱く者の多くは、この言葉を聞くと落胆する。

だが、魔導士に同じ事を聞くと、それは当たり前前の事だと返ってくる。

認識の差だ。

魔導士に言わせるのなら、「どんなに魔法が発達し、優秀になつたとしても、あくまでそれは技術としてであり、神が行使する奇跡とは根本的に違うものである」こう答えるだろう。

魔導士は魔法を技術として見る。

そうでない大多数の人間には奇跡に写る。

だから、魔法を扱う魔導士は何より現実主義者でなければなら
ない。
リアリスト

それが奇跡であると、他人が信じぬように、自らも信じぬように。

たとえ非情だと、冷酷だと謗そしられようと。

くくく

「……ふう」

リアは魔導士手帳を閉じると軽く息を吐いた。
美しい装丁が施された手帳を傷つけぬよう、注意深く机の上に置くと、壁掛けの時計に目をやる。

現在時刻は六時十三分。商工街での買い出しを終え、事務所に戻ってから約一時間が経過している。

リアはその間、自分が一週間過ごす部屋を整理していたのだ。

まあ、整理したと言っても、ハルカが暇を持て余し、定期的に掃除をしていた為、荷物を運びだしてから、軽い掃除をするだけで随分綺麗になった。その上、事務所の一角にあったこの部屋には、最初からベッドや鏡台といった物が置いてあった為、別段苦勞する事はなかったのだ。

まあ、そんな調子で三十分も経つ頃には、すっかり手持ち無沙汰になっていたリアは、前から興味があつた魔導士手帳をハルカから借り、今まで読んでいたのだ。

あまり面白いものでは無かったが。ただ……、

「現実主義者」

ハルカから最も縁遠いその言葉が、妙に印象に残った。
矛盾を感じたのだろうか？

リアはハルカの事を考えながら、机の上に置いた手帳をもう一度手に取り、部屋を出た。

ハルカ達に会いたい、何故か強くそう思った。

くくく

「……」

魔法は万能では無い、アルトは右手に銀色の刃を握り締めながら
そう思う、いや常々そう思っている。

確かに戦いの技術としては優秀だ、進化の余地も多分に残してい
る。だが。

「夕飯を作る訳ではない……だよな」

アルトは嘆息した。

事務所で夕飯を作る時には役割が決められている。

献立を決めるのはハル力達、作るのはアルト。

因みに決めたのはハル力では無く、アルト自身だ。

以前、ハル力が作った時、魔法研究の一環だとか、好奇心の表れ
だとか言っただけで黒い何かが皿に盛られた瞬間、アルトはそう言ってい
た。

「けど、シチューだったのは幸いか」

切って、炒めて、煮込めば良いんだからな

アルトは人参を乱切りにすると、水に浸けた。

その時、

「アルト」

ハル力が台所の入り口からアルトを呼んだ。

魔導士制服の上着を脱ぎ、楽な格好をしている。

アルトはそれを見ると言った。

「どうした？残念だが人参は入れるぞ」

「違う！」

「じゃあ玉ねぎか？残念だがこれも譲れな……」

「だから違う！あ、でも人参は避けてほしい」

ハルカは少し顔を赤らめてそう言った。

「はいはい」

「って、だから違う！真面目な話なの」

「真面目な話？」

アルトは包丁をまな板の上に置くとハルカに向き直った。

ハルカがこう言った前振りをした時はアルト自身無自覚だが、真剣に聞くようにしていた。

「うん、リアの護衛の事なんだけどね、期間は今日を含めて一週間だったよね？」

「ああ」

確かジークはそう言っていた筈だ。思い出しながらアルトは頷く。

「それに、その期間の間、生活の一際を任せるとも言っていたよね」

「ああ、そうだな」

こちらは厳格そうなジークからは想像出来ない、不安げな様子だったのでアルトは良く覚えていた。

「で、何が言いたいんだ？」

「アルトは、私と最初に会った時の事、覚えてる？」

アルトの言葉を聞くと、ハルカは、どこか嬉しそうな、懐かしそうな表情をして言った。

その言葉には聞くと言うより、確認の意が多分に含まれていた。

「忘れる訳がないだろ」

「そっか」

アルトは答える。そう忘れる訳が無かった。

自分にとって、運命を変えた出会いと言っても過言ではなかったから。

だが、アルトは茶化すように肩を竦め。

「深夜に街中で倒れてた女を助けたら魔法使いを名乗ったんだ、忘れる筈がない」

「うん」

「……怒らないんだな」

予想外の反応だった。

「私達しか居ないからだよ、アリス達がいたら攻撃魔法をぶつけてるよ」

ハルカは微笑んだ。

「怖いな」

「なら、言わない事」

「肝に銘じとく」

アルトがそう言うのと、少し間が開いてから、ハルカは口を開いた。

「その時の理由……」

「ん？」

「理由、覚えてる？」

「約束、だったよな」

アルトは窓の外に目をやると答えた。

ハルカも、アルトに倣って窓の外を見ると続ける。

「うん、自分の意志を通す事、世界を見詰める事、でも……」

「それをするには自分の世界は、白い世界は余りに小さかった」
繋げるようにアルトが言った。

「うん、だから、私は飛び出した、その時は自分自身、勝手だとも思った」

「後悔でもしてるのか？」

「ううん」

ハルカはそれを聞くと首を横に振った。

「選択をした時、人は選んだ以外の未来を失う、だから後悔する、けど私の未来は選択しなくちゃ変わらなかったから」

「……そうか」

また二人は黙り込んだ。

二人の間が、空気が動く事を拒むように。

だから、アルトはその空気を壊さないように微笑んで言った。

「で、お前はどうしたいんだ？」

「リアに、見せてあげたいの、私達が見た世界を」

ハルカはもう一度微笑んでいた。

216 はた迷惑な依頼人（後書き）

ハルカとアルトの過去の話に少しだけ触れました。後書きまで読んでくれて、本当にありがとうございます。

3-1 誰かの景色（前書き）

タイトルで悩みました、シリアスっぽいです。

3-1 誰かの景色

朝は苦手だ。

アルトはベッドから体を起こすと、窓から差し込む光に目を細めた。

どうやら昨日はカーテンを閉め忘れたらしい。

元々、アルトは朝早く起きるのは得意では無い。その上に、昨日は夕食の後、夜遅くまでハル力達に引き止められていた事もあり寝不足気味でもあった。

妙に体がだるい。もう一度眠ろうかとも思うのだが、アルトは昨日のハル力の言葉を思い出し、目を開いた。

「……ハル力が見た世界」

アルトはベッドから降りると、自室の隅に置かれた刀を手に取り、軽く埃を払う。

もう随分触っていなかった為か、その重みが体に馴染まなくなっているのを感じ、アルトは顔をしかめる。

黒檀の鞘から刀を抜いた。変わっていない。魔法は本当に便利だと改めて思う。

銀色の刃はあの時から時を進む事を忘れたように、美しい波紋を浮かべていた。

刀に水面が写り込むように。

アルトはそれを見て思い出す、刀を振るって生きてきた自分を、護る物は無く、何も考えずに、ただ戦ってた自分を。

そして……、そんな俺をハル力は変えた。

出会いこそ最悪だった気がするが、彼女の真っ直ぐな瞳に写る色

彩は、アルトという人間の世界を鮮やかに塗り替えた。

多くの時間を共有した。

馬鹿が付くほどのお人好し、いや大馬鹿が付くほどお人好しは笑って話すが、苦勞もした。

だが、それに後悔はしていない。

俺もハルカと同じだった、動かなければ未来は変わらなかったから。

だから俺は、今という時を得たことを感謝している。

ハルカに。

ハルカの世界に。

人が起こせる奇跡に。

アルトは刀を鞘に納めると、身支度を済ませ、すぐに着替えを始めた。

クローゼットを開け、中から適当な衣服を選び出し、自分の髪と同じ黒いコートを羽織る。

ふと鏡を見ると、最近切っていない長髪がだらしなく思えたので、紐で括つておく。

それから十分程で全ての準備を整えたアルトは最後に、先程置いた刀を腰に差した。

必要だと思ったから、それ以外の理由は無い。その筈だ。

アルトは自宅である下宿を出ると、丁度対面にある事務所の看板を声に出さずに読み上げた。

ウェイアーズ魔導士事務所。

そこが俺の居場所。

知らない内にアルトは口元を綻ばせていた。

『見せてあげたいの私達が見た世界を』

彼女の言葉を思い出しながら。

3 1 2 誰かの景色（前書き）

戦います。高校生なのに中二病です。

3-2 誰かの景色

扉を開く、何て事は無い動作だ。

目の前のドアノブに手を掛けて、軽く捻れば良い、何の技術もいらない。

確かに、事務所の扉は建て付けが悪いが、それを加味しても簡単な動作の筈だ。

木目調の中に混じって、幾何学的な光の軌跡が走ってさえいなければの話だが。

午前八時、商工街が賑わい始めたのを肌で感じながら、アルトは事務所の木製扉を見て顔をしかめる。

「……トラップか？」

術式から見ると、単純な対象拘束型。

ドアノブに触れた瞬間、光の網が自由を奪うという物だ。

しかし……、

「ハルカが仕掛けたにしては程度が低いが……」

アルトはとりあえず腕組みをして解除法を考えると、以前ハルカが遊びで仕掛けたトラップを思い出す。

あの時は気付く事も出来なかったし、思い出したくも無い目にもあった。

今回はリアの護衛がある為、遊びではないのだろうが、何故程度が低い？

アルトは扉に触れると、指先に魔力を集め、光の軌跡を幾つか絶つ。

魔法は一つの事象を起こすために多くのプロセスを踏む場合があ

る。特にトラップ系はそれが多い。

今回の場合は、ドアノブに触れたという情報を中心術式に集め、その後、扉に仕掛けられた各術式に伝達、魔法を起動させるという物だ。

「つまり、伝達線を幾つか切れば効力を無くす」

ダミーが無いとは限らないが、少なくとも今回は大丈夫そうに見える。

知識が半分、勘が半分の判断だ。

さっさと開けるか……。

アルトは一度だけ目を閉じると、すぐに指を走らせ数本の光を絶つ、すると、静かな音と同時に扉そのものに宿っていた光が消滅する。

開いた。

アルトは溜め息をつきながら、軽くドアノブを捻る。

若干の軋みを生じながら、扉が開かれ、外の光が室内を淡く照らした。扉を変えるべきか？アルトはそんな事を考えながら、中を伺うように首を伸ばした。

その瞬間、

「危ない！」

ハルカの声と共に無数の光の弾丸が爆ぜた。

爆発的な音が響き、無秩序な軌道を描きながら弾丸が迫る。

「っ！」

だが、アルトは声を漏らしながらも反射的に腰に挿していた刀を抜き放つ。

黒檀の鞘から生じた銀閃が尾を引くように空気を絶ち、迫る光の弾丸を一太刀で消滅させる。

魔法が余韻を残すように空気を震わせた。

「音速弾丸か？」
ソニックブレット

圧縮した空気を対象に打ち出し、内部で爆発させる戦術魔法。高い殺傷力が特徴で、おおよそハルカが使う魔法だとは思えな

った。

……敵か？

アルトは目を細めると、刀をもう一度振るった。

衝撃が走る、空気が揺れ、薄暗かった室内が光に満たされる。

魔導共振だ。

魔法は魔力と、その素となる物質、気やマナと呼ばれるものを消費する、そして、その素となる物質は特定の状況下において発光するという特性があるのだ。

アルトは単純にそれを利用した。

周囲を見回す、光に満たされた室内は何時も以上に明るい。

アルトは少し怪訝そうな表情で周りを確認する。音速弾丸が放たれたにも関わらず、内部の物が壊れた様子も、荒らさた様子も無い。

不自然な気がする。

だが、その考えはすぐに消えた。

ハルカが部屋の隅で立ち竦んでいるのを見つけたからだ。アルト

は思わず駆け寄り、肩を揺すり呼び掛けた。

「ハルカ」

長い髪と魔導士制服の裾が揺れる。

「……アルト」

ハルカは声に応じながら、酷くゆっくりと顔を上げた、その顔は

……、

悪戯をした子供の表情。

ハルカが口元を歪めた。

「詰めが甘いよ」

「！」

油断した。

足下の光が陣を形成し、形無き格子が出現する。

複雑に絡み合う光がアルトを包み込もうと広がり、収束し、拡散

する。

アブソリュート・プロテクション

絶対防御圏外部との干渉その物を遮断する防御魔法。

裏を返せば絶対の牢獄だ。

だが、構成前なら……！

「はっ！」

アルトは体を翻すように刀を払い格子を絶つと、飛び退き、事務所の前に着地した。

あまりに常人離れした動きだ、しかし、

「まだだよ！」

ハル力はそれすらも予想通りとばかりに、予め準備しておいた魔法を発動する。

グランディーション・スフィア

「重圧拘束！」

「なっ……！」

一瞬で形成された光の陣が力を発揮し、アルトの体を重力という名のナイフが地面に縫い付ける。

アルトは呻き声を上げ、思わず膝をついた。

自らの数倍の質量を上乗せする拘束魔法だ、普通では動く事はあるか、立つことすら出来ない。

「終わり？」

ハル力は楽しそうに笑いながら言った。相変わらず悪戯をした子供の表情で。

アルトは苦笑を浮かべ、それを見上げた。

「いや……終わってないさ」

ロスタイムの悪あがきだ。

次の瞬間、アルトの刀が発光した。術式が崩壊し、重力に生じた変化を破壊する。

スペルブレイク

呪文破壊

あらゆる呪文に用意された対抗術式をぶつけ魔法の力を喪失させる反魔法。

「あ」

ハルカの声と澄んだ音と共に魔法が霧散し、光が散った。

アルトはその隙を見逃さずに踏み込み、鞘をハルカに向け、言った。

「ゲームセットだ」

「うん、私の勝ち」

「ん？」

アルトは怪訝そうに顔を歪める。何だ？

ハルカは微笑むと、軽く指を鳴らした、花火のような小さな力がアルトの前で爆ぜる。

アルトはぼんやりとそれを見て言った。

「……みたいだな」

「でしょ？」

二人は互いに目を合わせると楽しそうに笑った。

ウェイアーズ魔導士事務所、室内。

「随分、周りくどい事をするんだな」

刀を手で弄びながら、アルトは半眼で言った。

頬には絆創膏、今まで気付かなかったが、消しきれなかった音速弾丸が掠っていたのだ。

「ごめんなさい、確かめたかったの」

謝ったのはリア。

「ごめんね、アルト」

ハルカも同じように頭を下げ謝る。

何でも、先程のあれはリアが言い出した事らしい。

二人の力を見てみたい。

疑いではなく、好奇心から来るものだったそれを、ハルカはあつ

さり快諾し、準備していたらしい。

ちなみに、最初の音速弾丸も絶対防御圏も手加減済みだったらしく、たとえ当たってもかすり傷程度の威力しか無かったらしい。

それでも、アルトからすれば良い迷惑だったのだが。

アルトはまた溜め息をつく。

「ま、良いさ、で？」

「ん？」

「今日はどうするんだ？」

ハル力はアルトの言葉に頷くと言った。

「王都観光」

「理由は？」

「私が行きたいって頼んだから」

リアが笑う。

それなら十分な理由だ。

「そうか、じゃあ……」

「待って！」

「何だ？」

ハル力は席を立つアルトを呼び止める、

「その前に朝ご飯」

笑いながら言った。

3-3 誰かの景色（前書き）

迷走？しました

3-3 誰かの景色

「そういえば、その刀どうしたの？」

朝食を食べ終え、アルトが熱めの珈琲を傾けていると不意にリアが言った。

店などが開くにはまだ余裕がある、回るにしても先にどこに行くか決めようという事で、食休みをしていたのだ。

因みに、ハルカは自室で準備中。

アルトはリアの言葉を聞くと、何時も通りの気怠げな動作でコーヒークップを置いた。

木製テーブルの上には白いカップが三つ。白い湯気は行き場を探すように、天井近くにまで昇っている。

アルトは湯気の間こうで問い掛けるリアを見た。

やはり、その目には純粹すぎる好奇心が映っている。

アルトは嘆息すると、

「趣味だ」

そう言い切った。

今となってはそれ以上でも以下でもない、確かにそう思っている。

「聞いちゃダメな事？」

「聞いても面白く無い事だ」

「そっか」

リアはティーカップに手を伸ばし、聞くのを止めた。

好奇心は人一倍、だが話したく無い事を無理に聞き出すつもりは無い。

アルトは少なからず、リアのそういった部分に好感を持っていた。
「二人共お待たせ」

リアがカップを置くのと同時に、ハルカが部屋に入って来た。

何時も通りの黒い魔導士制服を着込み、肩掛けの鞆を提げている。

「結構掛かったな」

「うん、持ってく物が見つからなくて」

ハルカは鞆を見ながら言った。

「それより、行く場所は決まった？」

「ああ、とりあえず白護外壁に行く」

「その後は王都街道をたどって王城に」

リアはそう言いながら、机に置かれた地図を指差す。王都の淵をなぞり、今度は中心に向かう複雑な道を器用にたどっていく。

「うん、良いルートだね」

ハルカはそれを見て言った。

観光にしろ何にしろ、効率的に回るのは大事だ。

「じゃ決定だな、そろそろ時間だし、行くぞ」

アルトは懐中時計をしまい、立ち上がると扉を開いた。眩い光が室内に入りこんだ。

白護外壁

大陸平和の記念碑と呼ばれるこの街に、敵を隔てる外壁は不要だ。なら、白い石造りの堅牢な壁は何のためにあるのか？

何の意味があるのか。

それを知る者はいない。

ただ、アルナス王国の歴史に、戦争というモノは只の一つも存在していない。

それは多くの記録と、戦いによる傷を知らない壁が物語っている。

リアはその外壁の上から、王都の外を眺めた。近くを流れる大河、平原を通る街道、蒸気機関車の音と共に、柔らかな風が吹き抜ける。空との境が曖昧になってしまいそうになる。

「ふぁ……」

「凄いな」

「うん、凄い」

外壁に手を掛けるリアは息を吐き、アルトとハルカも思い思いの感想を漏らした。

周囲のざわめきも気にならなくなる程だ。

「見惚れちゃうな……」

「もしかして、見た事無かったの？」

「うん、執務室の窓からじゃ時計塔で遮られてたし、自室でもこんなに綺麗には映らなかったか……わ！」

リアが声を漏らした。

ハルカが物憂げに話すリアの頭を突然撫でたのだ。髪を乱さないように意識しているが、出来る限り乱雑に。

リアが手を見上げると、ハルカは軽くウィンクをした。

「今は精一杯楽しまなくちゃ」

「……うん」

リアは少し熱くなった頬を押さえ、頷いた。

ハルカはそれを見て微笑むと、そのままアルトを見て言った。

「まずは、手始めにアイスかな」

アルトはそれに苦笑し。

「はぁ……そんな気がした、で？何が良い？」

「私はバニラ、リアは？」

「うーん、チョコレート」

「分かった」

アルトは取り出してあった財布を手に、屋台の方に向かった。

景色から意識を逸らすと、屋台の周りに随分と人が多い事に気付く。

屋台から離れて行く人が片手にソフトクリームを持っているのを確認して、屋台に近づいた。

色とりどりの装飾が施された屋台。それはアルフィールでは人気のケーキ屋の物だ。

ここのチーズケーキはハルカのお気に入り、良く買っている。

「アイスなんて売ってたんだな……」

アルトは至極どうでも良い感想を呟き、屋台の中を覗いた。

店員が此方に気付き、目が合う。

「はい、ご注文は……」

其処まで言っただ店員が凍り付いた。

「……何やってんだ？アレク」

魔導士協会事務員、アレク・カルハース、彼はアイスを片手に硬直していた。

「おい……、アレク」

「ち、違う！これは副業じゃなくて、ボランティアで！」

アルトが声を掛けると、アレクは急にまくし立てる。

アイスが零れるだろ。

「話を聞け」

「本当に善意からで、決して副業じゃ！」

「聞けって言ってるだろうが」

「がっ……！」

アルトはまくし立てるアレクの脳天に、刀を振り下ろした。

糸が切れた人形のように、膝から崩れ落ちるアレク。

視線が痛いのが気にしない事にする。

「落ち着いたか？」

「御陰様でな……」

アレクは頭をさすりながら起き上がる。思いの外冷静だ。

「で……、何だ？アイスか？」

「ああ、バニラが二つ、チョコレートが一つだ」

「三人分？もしかしてハルカさんも！？」

アイスを取り出しながら、一気に興奮気味になるアレク、まあ、好意を寄せている相手なら当たり前……なのか？

「まあ、来てはいるけどな」

「？けど、何だ？」

「お前の出る幕は無いつて事だ」

「おい！」

アレクから三人分のアイスを受け止り、代金を放った。

「じゃあな、協会に見つかってクビになるなよ」

「余計なお世話だ、それより」

「ん？」

アルトが振り返ると、アレクは少し真剣な顔で言った。

「騎士団が動いてる」

「それが？」

「本気で聞いているのか？」

アルトは怪訝そうな視線を避け、空を見た。

俺が見てる世界だ。

「ああ、何せハルカが信じてるんでね」

「……そうかい、なら仕方ないな」

「全くだ」

二人は離れ際に、

『今度飲みにも行くか』

そう言った。

3 1 3 . 5 誰かの景色（前書き）

相変わらず前書きとかは苦手です

313・5 誰かの景色

石造りの床を踏みしめ、ざわめく街道を抜ける。

周囲を見ずとも分かる、活気溢れる何時もの王都、私はその喧騒を普段以上に気にしながら、歩を進めていく。

普段は身に着けない深めのローブ、目元まで隠れてしまうそれを多少鬱陶しく感じながら、目を細めた。

しばらく歩くと、不意に喧騒が薄れる。

足を止めた、ローブを少し上げ、其処が開けた場所である事を確認する。目的地だ。

思わずその場所を見上げる。其処は、均等な白い石が積み上げられた堅牢な外壁だ。

風が吹き、ローブと髪を揺らした。

平原に隣接するこの場所は良い風の匂いがする。

堅牢なる壁の名は白護外壁、戦いによる傷を知らないそれは平和の象徴だ。

アルナスの歴史を語る上で欠かせないこの場所は、王都の観光名所でもあり、私の好きな場所でもある。

私は手近な石作りの階段を登り、辺りを見渡した。

目標を探す、これが今回の仕事だ、私は注意深く視線を巡らせるが……、

探すまでも無かったようだ。目標はすぐに見つかった。

金色の髪をした二人連れの少女。黒髪の男が見当たらなかったが、両手にソフトクリームを抱えながらすぐに戻って来た。

私はそれを確認すると、思わず動きたくなる衝動を抑え、息を殺す。

彼女達に気取られてはいけない。

そう、それが私の仕事だ。

思わず唇を噛んだ。自分自身気にもしているし、悪い癖だともよく言われるが、気にとめる人間は今私の隣には居ない。

「後、一時間……」

私は眩き、彼女達をもう一度確認すると、姿を隠した。

3-4 誰かの景色（前書き）

遥かなる道はあれど、果て無き道はない、そう信じたいです。
進んでんのかなコレ？

3-4 誰かの景色

風を掴むように手を伸ばす。

空に届くように、指先が星に触れるように。

手を伸ばす。

風が指の間を吹き抜ける。

誰だったか、人が想像出来る事に不可能は無いと言ったそうだが、頭上に広がる星を掴みとるイメージは夢に描いても叶いそうに無い。

夢は時に、人を絶望させる。

そついうモノらしい。

けど、夢は描かなくては叶わ無い。抱かなければ自らの指針を得る事も出来ない。

絶望は恐い。

それでも……、前に進みたい。

世界を変えたい……。

「ついでるぞ」

「え？」

アルトは手を伸ばすと、リアの頬に触れた。

先程買ってきたチョコレート味のソフトクリームを指先ですくい取り、軽く舐めた。

口に入れると、半分程溶けかかっているのが分かる。

「どうしたんだ？」

アルトはあまり反応を示さないリアを覗き込んだ。

アイスを一口食べてから、ぼんやりと空を見上げたままだったので流石に気になったのだ。

普段だったらこういう時にはハルカが声を掛けるのだが。ハルカは露天でアレクが働いていた事を知ると、「挨拶をしてくる」と言っ
て場を離れた。

今頃さぞ面白い光景になっている事だろう。

少々不謹慎な事を頭の隅で考え、頬を抑えながら、此方に向いた
リアと目を合わせた。

瞳が少し潤んでいる。頬が紅潮し、動悸も激しいのか、せわしな
く呼吸を繰り返している。

何かの病気？それとも酒か？

アルナスの法で飲酒は十八からとされているから後者は無いか。

「リア？」

「わざとかしら？」

「何が？」

「……馬鹿」

「え？」

突然罵倒された。

リアは理由が分からず狼狽するアルトに、

「自分の胸に手を当てて考えなさい」

と言うと、残ったアイスをさっさと食べ切り、丁度戻って来たハ
ルカの方へ歩いていった。

何かしたか？思い当たる節がない。

アルトは軽く首を傾げ、リアの後を追った。

「何だ……それ？」

アルトはバスケットに、正確には山積み菓子で積まれたバスケ
ットに呼び掛けた。

「飴とクレープ」

「どうした？」

「アレクさんがくれた」

バスケットの向こうから事もなげに答えるハルカ。

山積みの菓子類に埋もれている為表情が見えないが、声の調子から察するに多分喜んでいるのだろう。

甘い物好きだしな。

「ほどほどにしろよ」

「分かってまーす」

本当か？

一瞬疑うが、まあ良い。

そして多分アレクのバイトは今日限りだ。

いくら緊張したって、商品をプレゼントするのは流石に行き過ぎである。

「ご愁傷様だな」

「え？」

「こつちの話だ、ところで次は街道なんだが、昼も近いしどっか適当に入るか？」

アルトは外壁に手を掛け、アルフィールの方に目をやった。

時計塔の短針が十二を示そうとしているのが見える。

「ふっふっふ、その必要はないよ」

「は？」

不敵に笑うハルカはアルトの声を無視して、鞆から包みを取り出した。

派手すぎず、地味すぎず、センスの良い袋に包まれたそれは、アルトの目には負のオーラを纏っているように見えた。

というより、実際に異臭を放っていた。

「べん……とう？」

「そ！アルトが来る前に作ったの」

誇らしげなハルカは「どうだ！」と言わんばかりに胸を張って言った。

「リア……、知ってたのか？」

「ええ、知ってたわ。男性は手作りサプライズ弁当が好きだと、以前読んだ本に書いてあったから黙っていたけど」

はた迷惑な事を……。

アルトは逃げ出したくなる衝動を抑え、どうすればこの状況を脱する事が出来るかを考えた。

以前のサンドイッチでは魂を刈り取られる所だった。

だから考える、死にたくはない。

そして……。

「アレクにお礼をしよう」

アルトは普段だったら絶対に有り得ない台詞を棒読みで吐き出し、有無を言わずに弁当を取り上げ、走りだした。

「え？ちよつと!？」

ハルカとリアは呆然、アルトは生死の境、アレクはあっち側に立つ瞬間だった。

余談だが、この後アルトの財布が軽くなったのは言うまでもない。

315 誰かの景色（前書き）

加速します！凄くゆっくりと……！

315 誰かの景色

どこまでも続く白い石畳、所々に細かく施された装飾。幅の広い街道は思わず靴を鳴らしたくなる空気が印象的だ。

リアはそんな雰囲気に押され、思わず石畳を鳴らすように踏むと、軽快な音が響いた。

王都街道と呼ばれるそこは、今も昔も、多くの人間に親しまれる初代国王、カイウエル王が歩いた道だ。

「凄く広い……」

「そりゃそうだ、アルフィールが一番広い道だって言われてるからな」

興奮気味に街道を踏み慣らすリアに、アルトは言った。

実際に馬車が四台程すれ違いそうな幅があるこの街道。実はカイウエル王が歩いたというだけで、舗装されたのは百年程の昔なのだが、あまり知られていない為か、カイウエル王が作ったと勘違いされる事が多い。

以前読んだ観光パンフレットには誤った記述があった事を思い出し、アルトは石畳の装飾を見た。多少の傷や汚れはともかく、物質としての劣化は無い。

魔法による劣化防止が出来る以上、一目で作られた年代を図るなんて事は出来ないのだ。

そんな事を考えながら暫く装飾を眺めていると、露天を見ていた筈のハル力が声を上げた。

「アルト！リアは！？」

「え？」

思わず顔を上げる、今は昼の一時過ぎだ。この時間帯は食事や昼休みで人通りが最も少ない。すぐに見つかる筈だったのだ。しかし。
「いない？」

目を離れた数秒で消えた？いや、不自然すぎる。

まさか……

嫌な汗が頬を伝う。

「くそっ！」

次の瞬間、アルトは小さく吐き捨てると走り出した。石畳を蹴り上げ、人の波を掻き分けて進む。

景色が目まぐるしく入れ替わる。

周囲の露天が騒がしい、しかしそれ以上に石畳を鳴らす音が響く。打楽器を打ち鳴らしているようだ。

今は逸る心音が耳障りで、アルトには不協和音にしかならないが。暫く走り、周囲を見回す。

アルトは開けた道では無く、薄暗い路地を捉え、其処に駆け込んだ。

アルトの勘が半分、経験が半分の判断だ。今回は多少勘の方が大きい。

昼とはいえ魔法灯が申し訳程度にしか設置されていない路地は建物の影で薄暗い、アルトはその闇を裂くように走りながら、刀を振る。

光が闇を絶ち、一瞬、二人の人間のシルエットが浮かび上がった。アルトは瞬時に影を見極め、片方はすぐにリアだと認識した、しかしもう片方は……見えない、認識出来なかったのだ。

視界には写っている、だが魔法的な妨害が掛かっているのかどうしても認識出来ない。

「……予想より早いですね」

「え？」

影のそんな言葉と共に、光が路地に満たされた。

アルトは認識妨害を払い、リアの隣に立つ人影を見る。

目元まで隠れてしまう長いローブに身を包んだ長身の - 先ほどの声から恐らく男だろう - 人物だ。

一目で普通では無いと分かる、もしコレが最近の流行だというの

なら、アルトは普通とファクションの意味を書き換えなくてはいけなくなるだろう。

「リア！」

誘拐か？ 暗殺か？ 相手の姿から様々な思考を頭に浮かべる、だがアルトはそれを刀に乗せ、振り払うように踏み込んだ。

「しゃがめー！」

「えー！ アルト！？」

リアが驚きながら振り返るのを見て、アルトは刀を放り投げた！
「なっ！」

ローブの男も予想出来なかったのだろう。驚きを含んだ声を上げ、懷に手を入れる、だが男はそれに対応しきれず、刀は見事な軌道を描き、ローブの男へと向かっていく――筈だった。

涼やかな金属音。

刀は男の眼前で、見えない壁に弾かれたように宙を舞った。澄んだ音は刀が石畳の上に転がった物だ。

干渉を許さない壁、いや。

「その行動は少し予想外だったな」

「俺の方が予想外だ、物理不干渉と時間停滞の複合技何て使いやつて」
マテリアルキャンセラー クロノストッパー

「君も彼女に怪我をされては困るだろう？万全を期したまでだ」

男はアルトの声に至極真面目な声で返すと、リアの頭を撫でた。

「私は彼女に危害を加えるつもりは無い」

「じゃあ何だ、無目的の愉快犯か？」

「……語る必要は無いな、ただ今は退くさ」

男は嘆息したように言葉を吐き出すと、ローブを返し、手近な建物の屋根に登る。

ローブの下では微笑を浮かべていそうな程余裕のある動きだった。

「迎えに来るまでの間、彼女を頼むよ」

「待ちやがれ！」

アルトは刀を拾い上げ叫ぶが、これで待つ人間はいないだろう事

も承知している。

男の姿がすぐに見えなくなり、無駄な事を確認すると、アルトは刀を鞘に納めた。

確認しなくてはいけない。アルトが振り返るのと同時に、ハルカが息を切らしながら路地に走り込んできた。

「リア、アルト、大丈夫!？」

「俺は問題無い、それよりリアだ、治癒魔法の増幅器はあるか」

「うん大丈夫」

アルトはハルカがリアの無事を確かめるのを横目で見ながら、曇り始めた空が今にも大粒の雨を落としそうな事に気づき、顔をしかめた。

嫌な天気だ、今夜は大雨になるな。

結局、王都観光は途中で切り上げた。

今後の襲撃の件、リアの安全確保もそうだが、何らかの魔法を掛けられていないかを確認する為だった。

「もうすぐ事務所だからね？」

ハルカは笑いながら、リアを『見上げて』言った。

「うん」

「大丈夫だ、今度はハルカも近くに居る、何の問題も無いさ」

「そうじゃなくて……」

首だけ振り返りながら言うアルトに、リアは頬を染め、口元を何度か歪めた。

「わざわざアルトにおぶって貰う事は……」

「一応だ、検査は簡易的なモノだし、何時何が起きてもおかしくないからな」

「でも……」

正直恥ずかしい。リアは今年十三歳になったばかりだが、その居振る舞いは周囲に合わせ大人らしく、そして年相応でもあるのだ。恥ずかしく思わない筈がない。

「気にしない、気にしない！ 私も最近アルトにおぶって貰ったし」
「え？ 本当に？」

「お前が酔いつぶれるからだ……、酒弱い癖に飲み過ぎなんだよ」
「良いじゃない」

「あはは！」

それから三人は取り留めも無い話をした。楽しかった事、可笑しかった事。とても短い時間と距離。価値有る時間と絆。

何時の間にか事務所の前に着いていた。扉を開け、照明を点けた。
「リア、着いたよ」

「……」

「リア？」

ハルカがリアの顔を覗き込んだ。アルトも倣うように振り返る。

「眠ってるのか？」

アルトは言った、同時にそんな筈は無いと思う。ついさっきまで話をしていた。扉を開くまで、夕飯の話をしていたのだ。

「……魔法？」

ハルカがぼんやりと呟く。雨が地面を濡らし始めた。

3-6 誰かの景色（前書き）

頑張って書きました！

3-6 誰かの景色

「……結構強いな」

窓際に立つアルトは、休み無く打ち付ける雨を見て、鬱陶しそうに呟いた。

窓ガラスが声に合わせたように何度か揺れる。

アルトの予想通り、その日の夜は雨だった。

それも、雨季を離れたというのに近年稀に見る大雨だ、数日は降り続くらしい。

アルフィールでは、大雨によるシルム大河の氾濫が心配されたが、魔導士が堤防役として数人派遣されたというので、恐らく問題は無いだろう。

「うん」

ハルカは手元の娯楽小説に目を落としながら、アルトの声に無意識で返した。

小説を手にとったのは只其処にあったからだ。その証拠に、視線は羅列された文字を認識していない、一時間近く同じページを眺めているだけだった。

静かだった。街に霞が掛かり、窓から見える商工街に何時もの賑わいは無い。

石畳を打ち付ける雨の音、窓ガラスを揺らす風の音が部屋の空気を重くしているのを感じ、ハルカは小説を置いて席を立つ。

暖かい紅茶でも淹れよう、そう思った。あまり人には言わないが、アルトは甘党だから砂糖を沢山入れて。

「ハルカ」

席を立つとアルトが振り返って声を掛けた。

「何？ アルトはミルクティーの方が良い？」

「いや……リアの、様子は？」

アルトは少し目を伏せ、言いよんだ。

気になっていた、しかし、言い出せなかった。

あの後、ローブの男が姿を消したのを確認した。ハルカが治癒魔法を使い、怪我の類は勿論、呪術的なモノ、所謂呪いにも対処した。何の問題も無かった。

だが、あの後事務所に戻って来ると、リアは気絶したかのように『眠った』そして未だに目を覚まさない。

打てる手は打った、それでも、原因は不明だった。

「まだ……、だよ」

「そうか……」

ハルカの返答は分かっていた。ただ、聞かずにはいらなかった。

「大丈夫、きつとすぐに目を覚ますよ」

「……ああ、そうだな」

信じて待つ、今出来るのはそれだけだった。

暫くすると、ハルカが二人分の紅茶を木製の盆に載せて運んで来た。アルトは白い湯気が立ち上っているのを見て、大分冷え込んでいるのに気付くと、呟いた。

「寒いな」

「うん、はい紅茶、砂糖は多めで良いよね？」

ありがとう、アルトはそう礼を言って、カップに口を着ける。

何度か紅茶を口に運ぶと、アルトはカップを机の上に置き、ソファーに掛けてある毛布を引っ張った。

毛布のシンプルな白い布地は暖かみを感じる。

「リアに持っていくの？」

「寒いからな」

「そう、変な事しちゃ駄目だよ？」

「するか」

悪戯っぽいハルカの声にアルトは気怠げに返し、扉を開いた。

廊下に出ると、冷たい空気が肌を刺した。リアの部屋は廊下の突き当たり、つい最近まで物置に使われていた部屋だ。

「リア、入るぞ？」

アルトは軽くノックをして、扉を開いた。柔らかい匂いと共に、淡い魔法灯の光で、部屋の様子が浮かび上がる。部屋は綺麗に整頓されていた。

タンスに鏡台、小さなテーブル、シンプルなカーテンと、部屋の中心に置かれたベッド。リアはそのベッドの上で柔らかい寝息を漏らしている。

その顔は王女と少女、どちらのモノなのか。少なくとも自分には分からない気がした。

早く戻ろう、そう思い、アルトは毛布をリアに掛ける。そして、ふと悲しそうに笑った。

「大事にしてるんだな」

アルトの瞳に映っているのはリアの胸元で光る水晶だ。リアに渡した魔法結晶。

ペンダントトップにはめ込まれ、細部にまで丁寧な装飾が施されている。恐らく、ハルカとアリスがやったのだろう。意外とアリスは器用だから。

アルトは出来る限り明るく笑うと、ペンダントに触れた。

「もう一度、プレゼントだ」

その言葉と同時に光が水晶に集まり、満たした。

「お休み、リア」

「……ん」

部屋を出るアルト、何となくリアの声が聞こえた気がした。

「……ありがとう、ごめんね……」

涙で声が上手く出せなかった。

4-1 『少女』の一番長い日（前書き）

文字を選び出し、言葉を作る。

言葉を繋げ、文章を作る

文章を紡ぎ、物語は生まれる。

すいません。何を書けば良いのか分かりませんでした。

4-1 『少女』の一番長い日

降り続く、只それは降り続く。轟々と音を立て、大気を、心を揺らす。

私の視界に映るのは一つの景色。雨が打つ窓ガラス越しに見える灰色の街。

この景色を何かに例えるなら、窓ガラスを打ち付ける無数の雨粒は焦り、それを落とす暗雲は不安。灰色の街はきつと先の見えない未来だろう。

まるで、私の心のような。

私は一瞬だけ自嘲気味の笑みを窓ガラスに映り込ませる。ほんの一瞬、泣いている様に見えた。だから、私は目を閉じ、涙を拭う。

長い夜に、長い一日になるから。

「ふう……」

ハルカは娯楽小説を閉じ、軽く息を吐いた。ずっと同じ姿勢でいた為か、少し体がだるい。

四つ葉のクローバーを圧した梨を挟むのを忘れた事に気付いた、だが、今は構わないと思った。

ティーカップに手を伸ばす。

「あ」

指先に触れたティーカップ、それが酷く冷め切っている事に気付くと、ハルカは思わず声を上げ、白いカップを見た。

つい先程まで立ち上っていた筈の白い湯気は何処にも見えない。確かにあった筈の熱も忘れたように消えていた。

不意に切なくなり、同時に当たり前かとも思う。

ティーカップの紅茶が冷め切っている事に気付いたのは、紅茶を淹れてから三十分も経ってからだったから。

ハル力は冷たい紅茶を一気に飲み干し、窓の外を見た。

雨が降り始めた時から景色は変わっていない。暗く、冷たい空気が街を包んでいる。

制服のポケットから取り出した懐中時計と見比べて、ようやく今が午後十時である事が分かった位だった。

「リアが眠ってから、もう七時間……か」

ぼんやりと呟いた。

事務所に戻って来たのが三時過ぎだった筈だからその位になる。

明らかに普通ではない。そして魔法でも、呪いでも無い。考えれば考えるだけ分からなくなる、そんな気がして、不安になる。

「リア……」

暗い気持ち、それを追い出すように、ハル力は両手を合わせ、胸に押し当てた。何度か深呼吸をする。不安になった時の対処法、昔からの癖だ。

暫く続けると、大分呼吸が整い、幾分か気分が楽になった様に感じた。

「悪い、少し遅くなった」

丁度気分が落ち着いた頃、疲れたような声と共に、アルトが部屋の扉を開いた。冷たい廊下の空気が中に入るのを感じたが、アルトはすぐに扉を閉じ、ハル力の方に向き直る。

「……随分遅かったね、私には言えない事でもしてた？」

「してないっての、俺はナイスバディの大人の女性が好みなんだ」
「ふふっ、そっか」

落ち着いた様な気怠げな瞳、何時もの表情にハル力は少し安心すると、柔らかな微笑みを浮かべた。

冗談を言えたのには自分でも驚きだった。それに、久しぶりに笑えた気がするからか、心が軽くなった。

「……ん？」

そのまま暫く笑うと、ハルカは不意にアルトの様子が少しおかしい事に気付いた。

髪と同じ色の黒いコートが濡れていたのだ。それに、リアに持つて行った白い毛布の代わりに、両手にサンドイッチと簡単な料理が入った包みを抱えていた。

「どうしたの？ それ？」

「お前、何も食ってなかっただろ？」

「あ……」

アルトは包みを掲げながらそう言いつつ、すぐにそれを机の上に置いた。同時にスパイスの良い匂いが広がる。

アルトがハルカの身を案じ、夜でも営業している酒場を当たり、無理を言った成果だった。

「リアが起きた時、俺達が倒れてたらリアに心配を掛けるだけだからな、それじゃ意味が無いだろ？」

「うん、そうだね……、ありがとう」

「どう致しまして」

アルトはハルカのお礼を澄ました顔で受け取り、ソファーに腰を下ろした。

テーブルの上に置いた包みを開き、三人分の食事を用意する。

何時リアが起きてきても良いように、彼女が美味しいと言っていた、アンチヨビと卵のサンドイッチは、他のモノより多め買ってた。

ハルカはそれを見て、意地悪そうに笑う。

「早く来ないと無くなっちゃうね？」

「ああ、でも大丈夫だろ、あいつは意外と食いしん坊だから」

「うん、きつと匂いに釣られて、ね」

「ああ、そうだな」

二人は笑いながら言葉を交わすと、サンドイッチに手を伸ばし、気付けば、味も確かめずに飲み込んでいた。

ただ、食べ物を口に運ぶ、噛んで、味を確かめる前に、燕下する。次々と料理を口に運び、数を減らしていく。無理にでもそうしないと、喉を通りそうになかったから。

殆どの料理が包みから消えた。だが、アンチヨビと卵のサンドイッチだけは、一つも手をつけていない状態で残されていた。

ガラスが打ち付けられる音。煩い程の雨の反響で、アルトは目を覚ました。

何度か頭を揺すり、覚醒を促す。どうやら、何時の間にか眠ってしまったらしい。

ふと重みを感じて隣を見ると、ハルカが自分に寄りかかって寝息を立てているのが見えた。随分疲れていたのだろう。顔色があまり良くない。

アルトはあまりハルカを動かさないように気を使いながら、ソファーから腰を上げた。

毛布を探すが、リアに持っていったってしまった事を思い出し、とりあえず自分のコートを脱ぎ、ハルカに掛ける。

「こういう時は、無茶ばっかだな」

アルトは思わず苦笑しながら言った。

前に自分が風邪を引いた時もこうだった。一日中付き添って、そのせいで自分も風邪を引いて、恨めしそうに文句を言っていた。

彼女は、何時も大切な人が心配なのだ。だから優しくて、強い。そして、どうしようも無く弱い。

「ま、今回は俺がどうにかするさ」

懐中時計と外の景色を見合わせた。午前二時。結構時間が経っている。

アルトは息を吐き出すと、壁の近くに置いた刀を掴み、廊下に出

た。

暫く歩き、突き当たりの部屋の前で止まった。ノックはしない。ドアノブを軽く回すと、軋んだ音と共に扉が開かれた、光は漏れて来ない。

扉を潜り抜け、部屋を見回す。

荒らされてはいない、部屋の家具はそのままだ。ただ、机の上に置かれた魔法灯が、その灯りを失っている。

「……リア？」

彼女を呼んだ。暗い闇を払うように。

しかし、返事は返らない、返ってくる筈が無かった。

其処に彼女は居なかったのだから。

「アルト……」

立ち竦んでいたアルトは、突然の声に思わず振り返った。ソファで眠っていた筈のハルカがコートを手に佇んでいた。

「油断した……、見ての通りだ」

「うん」

アルトの無感情な声に、ハルカは切れかけの魔法灯のような表情で応える。声は精彩を欠いていた。

だから、アルトは聞いた。

「どうする？」

「分からない？」

「分かるさ、伊達や酔狂でお前と一緒に居たんじゃないんだから」
「そっか」

ハルカは、アルトのその言葉に一瞬目を見開くと、微笑んだ。

「取り戻そう、私達の友達を」

「ああ」

その瞳には確かな光が宿っていた。

412 『少女』の一番長い日（前書き）

最近スランプ気味で、更新が遅くなり申し訳ないです。

4-2 『少女』の一番長い日

黒を基調とした魔導士制服、術式を刻んだその上に幾つかのベルトを巻き、ホルダーに魔導具を固定する。

体を縛り付けるように複雑に絡み合うそれは、それ自体が術式を構築、巨大な魔法を制御し、遮断する役割を果たす。魔導士にとって文字通りの鎧であり、武器だ。

制服に刻まれた術式は元々鎧を構成する意味合いが強く、普段は只の装飾と大差は無いのだが、それを知る者は殆ど居ない。

ハル力は鏡を見ながら術式を再度確認し、制服の上に外套を羽織る。

そう言えば、最後に鎧を構築したのは何時だったか、そんな事を一瞬頭の隅で考えた。

アルトが居なくなった時？ アリスが誘拐された時？
混乱してるのか、あまり良く思い出せ無い。

まあ何にせよ、鎧を使うのは大切な物を取り戻す時。それだけ分かっていれば良い。

「……失ったりなんかさせない」

彼女にとって、鎧を纏うのは覚悟の表れなのだから。

扉を閉める音が妙に大きく聞こえた。

大気を揺らす雨音、時を刻む秒針の音、煩わしいそれらを破るように、扉が開かれた。

魔導士制服に上乗せされた術式、一般に鎧と呼ばれる装備を纏い現れたハル力は、アルトの視線に応えるように微笑むと、ゆっくりと手を上げた。

「お待たせ」

「待たされた」

アルトも苦笑混じりにそう返すと、ソファから立ち上がり、気怠げに、だがしっかりとした足取りでハルカに歩み寄る。

準備は整えた。心構えもある。

アルトは鞆を握る手に、一瞬だけ力を込めた。

「……行くぞ」

「うん」

二人は頷き合った。

アルトが先頭に立ち、扉に手を掛ける。雨に身を晒そうと足を踏み出した、その時、

「……間に合ったか」

「アレク？」

魔導士協会事務員、アレク・カルハースが荒い息を吐きながら扉を押さえた。

余程慌てていたのか、外套も羽織っていない彼の全身は、雨に濡れたというより、川にでも落ちたという方がまだ信じられる様相だった。

「お前、何で此处に……」

「騎士団が騒いでるって言っただけ……、豪雨とは言え、夜間の警備体制が厳しすぎる。オマケに自動車も、乗り合い馬車も運休にならない」

アレクは息を整えながら、一つずつ理由を纏めると、アルトの顔を見て呟いた。

「一応、アリス・ルミアにも伝えたが、つまり、そういう事だ」

「なる程……、で、アレクはわざわざ力を貸しに来た？ クビを覚悟で？」

「いや、偶然だ」

「そうなんですか？」

「貴女に力を貸しにきました！」

「人の厚意を無碍^{むげ}にするな！」

アルトはハルカの手を握るアレクを鞘で殴打する。鈍い音と共にアレクがうずくまった。

「アルト！」

「ハルカ、自分に正直に生きるってのは大事だと思うけどな、行き過ぎは良くないんだ」

遠い目をして、明後日の方向を向くアルト。

かなり容赦のない一撃だったのだが、アレクはそれなりに丈夫なので問題無いだろう。

まあ、こんな事をしている場合では無いとも思っただが、幾分か緊張が和らぐのを感じると、うずくまるアレクを見下ろした。

「アレク、助かった」

「そうかい……、一応、乗り合い馬車は六時半、機関車の始発は七時だ」

「後四時間……だね」

「そんだけあれば十分だ」

アルトははつきりとそう告げると、事務所を飛び出し、商工街の地面を蹴った。

石畳を濡らしていた雨が弾ける。

「先に行くぞ、見つからなかったら二時間後に此处で落ち合おう」

「うん、けどその前にアルト！ 忘れ物！」

ハルカはアルトに応じながら、魔法結晶を放り投げた。彼女の手から離れた魔法結晶は放物線を描き、アルトの手に握られた。

クロアの母親を探した時に使ったのと同種の魔法が込められたそれを、確かめるように懷に収めると、アルトは夜の街を駆け出した。

4-2・5 『少女』の一番長い日（前書き）

誰かが動いているシーンは難しいです。

412・5 『少女』の一番長い日

夜の闇、灰色の雨、昏い街に落ちる深い影は、闇を払う魔法灯の明かりを、食い潰そうとしている様にも見える。

儚くも必死に抗うそれは、彼女のように思えた。

「リア」

アルトは呟くと、握り締めた魔法結晶に目をやり王都を駆ける。

もう二時間近く経っただろうか？ 何時の間にか時間の感覚が曖昧になっていたが、懐から取り出した時計だと、後二十分はあった。「やはり、見つからないか……」

広大と言って差し支えない王都アルフィール。一人の人間が、一人の人間をこの街から探し出すには、それこそ奇跡が味方をしない限り不可能なのかも知れない。

数学者がこの不可能を計算したら、はじき出される確率は一体どの程度なのだろう。

いや、考えるのは無意味だ。

アルトは頭に浮かんだ確率論を早々に破棄した。必要無い、いや考えるまでも無い。

陳腐な台詞かも知れないが、奇跡は起こすもんだ。ハル力なら間違いないそう言うだろう。

もう整理は着いてる。

アルトは外套を被り直し、事務所に向かって駆け出した。

この闇を越え、声と想いが彼女に届く時を祈りながら。

街を覆う闇は深さを増していた。

白石造りの建物の影は、日を受けて輝く事無く街を覆う。

石畳を濡らす雨は、既に浸ると言った方が適切な程だった。

「私は……」

窓越しに見えるのは変わらない景色だ。でも私は変わろうとしている。

私の見る景色は変わろうとしている。明るくはないし、後悔が深い何かを落としたと思う。

「そんな事、考えても無かったな……」

だから少女は願った。彼女達がこの場所に光をもたらし、道を照らしてくれる事を。

窓ガラスに触れると、自分の背後に誰かが居る事に気付いた。振り返る。

厚手のローブ、目元まで隠れてしまうそれを被った男がリアの背後に立っていた。魔法灯の明かりが深い影を生み出し、どこか不気味な印象を受けた。

自分もこの中では似たように映るのかも知れないが。

「失礼します姫、それとも、リアの方が宜しいですか？」

「どちらでも構わないわ、もう直ぐ呼び方も限られるのだから」

男の言葉に応じると、リアはブロンドの髪を返し、窓の外をもう一度だけ見た。

「お……いて」

それだけ言って、リアは男の後に着いて行く。

悲しげな表情を浮かべた彼女の手には、光の欠片が握られていた。

何時だったか。こんな気持ちになったのは。

地面を蹴り上げる度、踵から弾けた水が宙を舞った。

肌に触れる黒い雨粒が体温を奪っていくのが分かった。

視界は殆ど無い、只空虚な闇が広がっている。

私は走っていた。リアを探して。

ハル力は一度屋根の下に入ると、懐中時計を見た。アルトと約束した時間までもう十分も残されていない。

つまり、後二時間でリミットだ。

ハル力は懐中時計を懐にしまい込み、息を吐く。まだ時間はある。諦めるには、絶望するにはまだ早い。

だって、アレクさんやアリスも、リアの為に動いてくれた。

それは彼女が自分達にとって大切で、もう諦められなくて。大好きだから。

「誰かの泣き顔なんて見たくないよ、リア」

ハル力は事務所に向かって走り出した。

リアの声が聞こえた気がした。

4-2・5 『少女』の一番長い日（後書き）

あとがきまで読んでくれる人に感謝です！感想とかくれたら嬉しいです。

4-3 『少女』の一番長い日

「はあ……」

深い息を吐き出す。冷たい空気が、疲れたようなそれを白く染めた。

リアを探して王都中を駆けていたアルトは、二時間の経過を確認して事務所の前に戻って来ていた。

ハルカから受け取った魔法結晶を手の平で転がし、二度目の溜め息を吐く。

雨で冷えた体を魔法で温めようかと考え、事務所の看板を一瞬だけ見上げた。簡単な熱を生み出す魔法が良いだろう。

アルトはそれを思い出すと、ふと、足音が近づいて来る方に向き直る。ハルカだ。

「はあはあ……アルト」

ハルカはアルトの前まで走って来ると、荒い息をつきながら、彼を見上げた。金色の髪と黒い制服が濡れている、しかし瞳は悲しみの色に濡れてはいない事を確認し、安堵する。

アルトはある程度の緊張を含み、ゆっくりと口を動かした。

「見つからなかったみたいだな」

「……うん」

「でも諦めてない」

「うん、絶対に諦めたく無い、絶対にだよ」

ハルカの言葉にアルトは頷く。今更だと、改めて実感した。心配する必要はない、彼女はハルカ・ウェイアーズだ。

アルトは笑みが浮かぶのを必死で抑える。きっと簡単では無い、だが、コイツなら上手くやるだろう。自分はそれを全力で支えれば良い。この、最高にお人好しな魔法使いを。

「じゃあ、行くか」

「え？ アルト、リアの居る場所分かるの？」

「世の中奇跡ばっかじゃ通んないからな。必然は俺が引き受けるさ」

アルトはそう言うと、雨粒を弾いて歩き出した。

頼りになる視線を背に受けながら。

王都が見える。

冷たい雨と闇に覆われたアルフィールが。

リアは窓を伝う雨粒をなぞるように、指を滑らせた。

冷たい窓ガラスの感覚。それが「もう触れる事は出来ない」そう言っているような気がして、思わず顔をしかめた。

手足を投げ出し、息を吐く。周囲をぼんやりと見回した。

カビ臭い空気。乗客の事を考えていないであろう、固い木の椅子、天井を見上げれば、荷物を載せる為の格子棚が自分を見下ろしている。何の変哲も無い列車の中だと分かる。

「もう少し、かな」

呟いた。時刻表を見れば分かる事だが、始発は午前七時。先程時計を確認した時には午前五時の少し前だったので、後二時間以上の余裕がある。決して短い時間ではない。

と言っても、乗客用の通常運行ならだ。

アルナス王国と隣国のカルシア共和国。鉄道開通以来五十年、両国の貿易手段は、街道を通るものから、国境都市を通しての鉄道貿易に変化した。貿易用の貨物車、両国のそれが行き交う時間は午前五時と午後三時の二回。

リアが座って居るのは、その貨物車に繋がれた車両の中だった。後数分……。

列車が出たら、ハル力達はもう追い付く事は出来ないだろう。

視線を落とす。これからの事はもう考えてある。不確定要素は全て排除した。不安は無い、無い筈だ。

「それなのに……、なんで……？」

零れた雫が答える事は無い。分かってる。分かってるのに。

ゴウン……！

リアの涙が落ちるのと同時に、魔法を用いた動力機関が唸り、獣の呻きのような重低音を響かせた。

動力機関から生まれた力は圧縮され、車輪を、巨大な鋼鉄の塊を、ゆっくりと動かし始める。

大気が揺れ、景色が変わる。

窓を伝う雨の筋が、天蓋を流れる星のように、ゆっくりと、ゆっくりと落ちていく。

終わる。そう、これはリークスファイア・フォン・アルナスのエピローグだ。

私の終わりだ。私の勝手な幕引きだ。

目を閉じ、そう思った瞬間。

「え……？」

視界が光に塗り潰され、窓ガラスが雨粒と共に碎け散った。

透明なそれは霧散し、美しく、雪のように散る。

あまりに常識外れした光景だ。

走り出したばかりとは言え、列車の中に外から入り込める人間がいるだろうか？ 窓ガラスを粉末状になるまで碎ける人間は？

いるはずがない。

「リア、お待たせ」

「悪い、待たせた」

リアの前に立つ、会いたくて会いたくない彼女達以外には。

4-3 『少女』の一番長い日（後書き）

後書きを読んで下さった方、感想をくれると嬉しいです。

4-4 『少女』の一番長い日（前書き）

動きの部分で時間が掛かりました。感想があれば宜しくお願いします。

4-4 『少女』の一番長い日

「どうして……？」

リアは震える声を押し留めるように、両の手で口元を覆った。

信じられ無かった。来れる筈が無かったから。

居場所は隠蔽した。此処に至るまでには兵士もいる。積み荷を守る為、安全を確保する為の精鋭。そう偽って、自分の為に動く人間を用意した。裏切りは有り得ない。

それなのに……！

「何で……！！」

「何を聞きたいのかは分からないが、とりあえず、居場所が分かったのはそれだ」

立ち上がり怒鳴り声を上げたリアに、アルトは飄々とした態度で応じ、リアの胸元を指差した。

そこにあつた魔法結晶。ペンダントに加工された光の欠片は、雨に濡れながら、淡い光を放っていた。

「気付いてたろ？ それに俺が魔法を込めたの」

リアは一瞬顔を伏せ、直ぐにアルトの目を見つめ返した。

何も言わないのは肯定。そう受け取り、アルトは続ける。

「まあ、簡単な話だ、それを追ってきた」

「……私が起きていたと気付いていたのなら、捨ててしまうとは考え無かったの？」

皮肉げに、自嘲したようにリアは笑う。降りしきる雨のように冷たい視線を、アルトに向けた。

「考えなかったさ。いや、捨てないと思ってた」

「……何故？」

「リアは良い奴だからな」

「……！」

リアの問いに、当たり前のように返すアルト。普段の気怠げな色が見えない瞳に見据えられる。心の奥を見透かされそうで、リアは思わず目を逸らした。

だが、いつの間にか自分の前に立っていたハルカに頬を押さえられ、強制的に目を合わされる。

「一週間だったよね？ リア」

何も言えなかった。涙が零れそうになった。

彼女達はもう気付いているのだらう。これが私のエゴだと。王女という責任を放棄しようとしている私に。『リア』になりたかった私に。

「まだ時間はあるよ？ 思い出も沢山作れるよ、だから……」

あ。

「帰ろうよ？」

ハルカがそう言った瞬間。リアの心の天秤が傾いた。

「……いや」

「え？」

「帰るなんて……、帰るなんて……、嫌だあつ……！」

「ハルカっ……！」

リアの絶叫が車内の空気を揺らし、光が散った。

無数の光芒が空気を圧縮し、魔法の弾丸に変わったそれが、二人を射抜く様に延びる。

「ちいっ……！」

放たれた弾丸の軌跡を見切り、アルトが刀を振るう。刹那の内に放たれた銀閃は魔法の光を掻き消し、車内を夜と雨の闇に沈めた。魔法の残滓だけが星のように車内を照らす。

「アルト！ 今の！？」

「リアじゃない！ 上だ！」

叫び声と共に天井が砕け、一振りの剣が車内の床に叩きつけられた。

そう認識した瞬間、アルトの立っていた場所が横薙に両断される。生じた剣圧が空気を巻き込み、まるで嵐に撫でられたように、車内の椅子や格子棚が弾け飛んだ！

「今のは確実に殺すつもりだったんだが……」

「あの程度で死ぬんなら、とつくに死んでるさ、依頼主さんよ」^{ジーク}

車内の粉塵が汽車の風で流されると、白いローブを纏った男が大剣を握り締め、アルトに対峙していた。聖騎士ジーク・レイザス、王女を護る騎士が。

「気付いていたか」

アルトは薙かれた空間から一歩引いた位置で、刀の切っ先をジークに向けた。どこか真剣で、どこか浮ついた不思議な笑みを貼り付けて語られた言葉は不安定な感覚を覚える。

「ハルカ！ リアは奥の車両に走っていった！ 早く行け！」

「でも！ アルトは！？」

「この馬鹿倒してさつさと追うさ、だから……」

ハルカの声に振り返らないで、アルトは言う。先程の不安定な感覚は消えていた。

「此処は任せろ」

「うん！」

415 『少女』の一番長い日（前書き）

戦闘シーンを頑張りました！

4-5 『少女』の一番長い日

「アルト、絶対にすぐ追いついてよ！」

ハルカはそうアルトに言い残すと、ジークの横を抜け、最早原型を留めない程に破壊された車内を駆け、闇に沈む車両の奥へと消えていった。

大気が静まり返る。

ジークは靴音の残響を見送るように一瞥すると、アルトに向き直り、剣を構えた。

「良いのか？ 魔導士の手助けが無くて」

「アンタこそ、良いのかよ？ ハルカを通して」

アルトは刀の切っ先をジークに向け、からかうように笑う。ジークは眉一つ動かさずに応じた。

「問題は無い。彼女が姫様を変えるなら、私はそれに従うまでだ」

「そうかい……！」

アルトはそう言った瞬間に床を蹴り、刀を振り払った！ 車内の粉塵が舞い、一瞬の内に眼前に迫った剣閃を、ジークは大剣を振り上げて殺し、そのまま押し切る。アルトは力を流すように一歩引き、返す刃で切りかかるが、ジークはそれを左手の籠手で受け、大剣を振り下ろした。

二人は幾度となく必殺の刃を振るう。視界を埋め尽くす無数の剣戟が戦いの苛烈さを物語る。

大剣が刀を弾き、刀が大剣を流す。魔法で護られた鋼鉄の刃が触れる度、青白い火花が散り、闇を染める。

殺気にも似た空気に、酔ったような感覚を覚え。二人は刃を交えたまま、同時に口角を吊り上げた。

「私とお前は似ている」

「どこがだよ？ って言いたい所だが、何となく分かる」

空気を裂く一閃が車内を撫でた。

「護るべき者が居る」

「護りたい奴が居る」

アルトは刀を、ジークは大剣を強く握り締め後退し、互いに距離を取る。緊張を混ぜた空気が停滞した。

「私は姫様に救われた。彼女が居なければ今の私は無い」

「俺はハルカに教えられた。生きる意味ってやつを。けどな……！」
アルトは視線を鋭く細めた。

「俺とアンタは決定的に違う」

空気が変わった。

ジークの瞳に、強い熱が見える。感情を露わにしない彼なりの激情。殺意にも似た空気。ジークは大剣を掲げた。

「違う？ そうだ、私はお前とは違う！ 姫様の隣に立ち、姫様を護る！ どんな手段を用いようと、姫様の行く手を阻む全てを断ち切ってみせる！」

「それが違いだ！ お前は護るしか出来てねえんだよ！ 道に迷った時、道を見失った時。一緒に悩んで、一緒に探してやる。隣に立つってのはそう言う事だ！」

その言葉に続くように、二人の武器に、無数の光芒が伸びる。

魔力を込め、想いを込め。空に挑むように、空を絶つように。碧い光の柱は束ねられる。

彼等が手に在るそれは一振りの剣。

「俺たちは、決定的に違う！」

「私たちは、決定的に違う！」

大気を巻き込むように伸びた光の剣が、全力を持って振り下ろされた。

光が交叉した。

衝撃。轟音。世界の一切が光に塗りつぶされ、空を覆っていた暗雲を貫き、拡散する。

光が伸びた先に蒼穹が広がった。

4-6 『少女』の一番長い日（前書き）

楽しんで下さい！

4-6 『少女』の一番長い日

「……っ！ はぁ……」

照明が落ちた車内を駆ける。煩い雨音を払う。

全部押しのけて、前へと進む。

それでも光が差し込む事は無い。暗雲に覆われた空は光を阻む、
阻み続ける。

それは不安と、諦めと、絶望が入り混じった暗い空。

故に届かない。届かない。

願っても、望んでも。届かない。

……それでも……、光はある。

空を暗雲が覆っても、雨が降っても。その闇を越えた先には、間
違いなく光がある。

私は越えてみせる。

届いてみせる、リアに。

「やっと……追い付いた」

ハル力が最後の扉を開き、軋む板張りの床を踏む。魔法の気配は
無い。ただ湿った空気が自分にまとわりつくのが分かる。

そのまま歩を進め、丁度五歩目を踏んだ所で、車両の端にリアが
座り込んでいる事を認識した。

ハル力がそこで立ち止まると、リアが小さく呟いた。

「なんで？」

「なにが？」

「……ハルカ、なんで？ どうして私を追ってきたの？ なんで私が居なくなるって分かったの？」

顔を上げないまま、涙が混じった声でリアは問う。

それが自分への問いでもあると、理解して。

沈黙が降りた。ハルカは考えるような仕草もとらず、リアの前に歩み寄った。床が軋む音と、雨音だけが響く中、ハルカはリアの前に座り、彼女の体を優しく抱きしめた。

愛おしい者を護るように、強く。

「あ……」

「理由は……、良く分からないよ。ただ、どこかに居なくなっただけじゃなかった。もつと一緒に居たかった」

「そんなの……。私は……、嘘を吐いたんだよ？ 私は我が儘で動いたんだよ？ 王女が嫌で、リークスフィアが嫌で、リアになりたくて……！ 軽蔑するでしょう！？」

「しない！ しないよ！！」

「どうして！？」

「リアが好きだから！」

「……え？」

リアが突き放すように荒げた声に。ハルカは当然のように返す。
自分は彼女達を利用した。自分の我が儘の為に、それなのに……。理解出来ない、裏切られたら嫌いになる、軽蔑する。それが普通だ。普通なのに……。

ハルカはそんな私を好きだと言う。好きだって言ってくれる。

「そんなの、おかしい……よ」

「おかしくない！ きつと、アルトもアリスも。ううん！ 二人とも絶対そう言うよ」

「うっ、あ……ひっく……私、私は……！ 嘔吐いて、我が儘言っただ……のに……！」

「リア、大丈夫だよ」

涙を流し、声を上げるリアを強く、より強く抱きしめる。

ハルカは優しく、しかしはつきりと想いを言葉にする。

「嘘を吐いた狼少年は食べられちゃったけど、リアは何度嘘を吐いても大丈夫だから。だって、私達が何度だって信じるから。どんな我が儘だって真っ向から向きあってあげる、駄目な時は止めてあげる。楽しかったら、私達も一緒に楽しんじゃう。これから、ずっとだから……」

リアはハルカに縋るように抱き付く。ハルカはそれを受け止め、優しく彼女の髪を撫でる。

うん、今なら　きつと届く。

「帰ろう、リア」

ハルカが笑い、その言葉が届いた瞬間。光が射した。

暗雲を絶ち、空を塗り替える碧い剣。交叉した光の先に広がるのは、深くどこまでも澄んだ蒼。

流れる風が心の風車を回した。

眩いばかりの陽光が二人を照らす。

リアは光に一瞬だけ目を細めると、金色の髪を揺らし、ハルカに微笑みかけた。

「うん」

その言葉は何よりも強く、朝露よりも清らかで。
陽光に負けない位に明るくて、虹よりも鮮やかな笑顔だ。

彼女の名前は……。

エピソード（前書き）

最終回です！ 此処まで読んで下さった方、是非感想を下さい！

エピソード

特報

『鉄道大破！？』

「三日前の未明、アルナス王国と隣国カルシア共和国を繋ぐ鉄道が大破していた事が判明した。

未だ原因は不明だが、魔法検察官による検証では、破壊された後を見る限り、「何か強い力で叩き壊されたようだ」との事だ。

現在検察では、暴風によって何らかの被害を受けた事故としての捜査が進められている。

尚、本件との関連性は不明だが、シルム大河上の鉄橋周辺から、碧い光の柱が伸び、暴風雨を消し去ったという目撃証言がある。

まことに信じ難い事だが、三日間降り続くと言われていた豪雨が実際にその姿を消した所を見るに、虚言の一言で片付けるには、余りに早計であると言える。

今後我々はこの超常的事態の調査を進めると共に……。」

「随分派手に載ったな……」

木製の古椅子に身を預けたアルトは、嘆息するように息を吐くと、特報と書かれた新聞を放った。

軽い音を立て、テーブルの上に見慣れた構成の誌面が広がる。

平和記念碑速報 アルナスタイムズ 小難しいというより、完全に創刊者の趣味で付けられであろうタイトルの情報誌は、新聞

というより娯楽のような面が売りの、一風変わった日刊誌だ。

ハル力が愛読している為、アルトも毎日目を通してはいるのだが、毎回情報の濃さや誌面の厚さが違う上に、連載している短編小説もかなりの頻度で飛ぶ。

つまり、当たり外れの大きい事で有名なのだ。

ただ、裏付けの取れない情報は載せないなど、情報誌として誠実な部分は評価出来る。

そのせいで、ゴシップ記事は面白いとは言い難いのだが。

……しかし、我ながら上手く処理したモノだ。あれだけの惨事だったというのに、誌面には曖昧な表現が多い。負傷者が自分達だけだった所も大きいのだろう。

隠蔽工作を手伝ってくれたアレクには感謝しなくてはいけないな。今度飲みに行ったら、少しばかり奢ってやろう。

まあ、回り道はしたが、今回は上手くまとまったと言った所だ。ただ、今回上手くいったからといって、二度としたいとは思われないが。

アルトはインクの滲んだ誌面をぼんやりと眺め、コーヒーを一口啜る。

久しぶりに落ち着いた朝だ。そんな事を頭の片隅に浮かべた瞬間、事務所の扉が勢い良く開かれた。

見れば、そこには活発そうな笑顔を浮かべる少女が一人。

「おはようございます！」

「ああ……落ち着いた朝、短かったな……」

再び溜め息を吐く。アルトはコーヒーカップをテーブルの上に置いた。

淹れたばかりの為か、白い湯気が立ち上っている。アリスは湯気越しに問う。

「あれ？ アルトさん一人ですか？」

「見ての通りだ」

室内を見回すアリスに肩をすくめ、軽く応じる。見慣れた部屋は閑散としており、人の気配は無い。

「そうですか……」

あはは、と笑顔を浮かべたまま落胆するアリス。笑顔を崩さないのは流石と言った所だが、妙に疲れているような感を受ける。アルトはカップを手に取ると、そんな彼女に何気なしに聞いた。

「ところでアリス？」

「はい？」

「あれからまだ数日だ。お前は随分頑張ってくれたし、その……、疲れてないのか？ もう少し休んだって良いと思うが」

「え？ あはは！ 私はへーきです！ ハル力達の為ですから！」

一瞬キョトンとした表情を作ると、アリスは屈託の無い笑顔を浮かべ、アルトに言った。

これが一切の冗談を抜きにした言葉なのだから、まったくもって脱帽する。

あの日、事務所に戻って来た自分達を笑って迎えてくれた彼女の姿は、新しい記憶ながら印象的だった。

「……そうかい、まあ無理はするなよ」

「はい！ でも、私は恩返しが済んでませんから！ ハル力にもアルトさんにも！ だからまだまだ頑張りますよ！」

「そっかあ……、じゃあ恩返ししてもらおっかなあ……！」

「え？ わひゃあ！」

アリスが手を胸の前で合わせて熱弁を振るうと。どこからか現れたハル力が、突然背後からアリスに抱き付いた。

銀髪を揺らし、ジタバタと暴れるアリスを抑え、満面の笑みを浮かべるハル力。

「ちよっ……！ ハル力あ！」

「えへへ、ありがとう」

ハル力はアリスが落ち着きを取り戻したのを見計らいそう言うと、

軽い靴音を響かせ、アリスから離れた。

悪戯っぽい笑みは彼女らしい。

頬を染め、アリスはハル力を睨む。

「もう……。準備は済んだの？」

「うん！ 勿論！ 主役も大丈夫！」

「本当に？」

「大丈夫だって！ アリスこそ、今日は沢山歩くんだから準備はしつかりと……」

「おい」

言い争う二人の間にアルトは横槍を入れる。突然の言葉だ。二人はキョトンとした表情でアルトの方を向いた。

椅子に身を預ける彼の表情は、呆れていると心底訴えかけていた。

「ん？ アルト何か忘れ物？」

「いや、扉の前で待ちぼうけを食ってる奴がいるんだが？」

「え？ ああ！ ごめんなさい！」

アルトにそう言われ、慌てて扉の前に駆けていくハル力。

古びた扉を開き、迎え入れられたのは二人の男女。

厳格そうな騎士と、高貴な雰囲気纏う少女だ。騎士は幾分か柔らかい表情を浮かべ、少女は緊張したような面持ちで此方を伺っていた。

ハル力は満面の笑顔で二人に応じる。

「ウェイアーズ魔導士事務所へようこそ！ 本日のご依頼は何ですか？」

「あ……。その私……」

「姫様、落ち着いて」

「わ、分かってるわよ……！　その、王都の観光を手伝って欲しいの」

「はい。ところで……、貴女のお名前を伺っても宜しいですか？」

「あ……」

「姫様」

「う……、リ、リークスファイア……、リークスファイア・フォン・アルナス。リアって呼んでくれると嬉しい、かな……」

「クスッ、はい！　その依頼、確かに受けました！　じゃあリア、あの日の続きを始めましょう！」

ハルカはリアの手を取る。

繋がる手、優しく引かれるそれを見て、少女は笑う。

暖かな想いを受け、自分を自分にくれた貴女に感謝して。

「ありがとう、私を見つけてくれて」

「うん！　どういたしまして、リア！」

二人の笑顔を見下ろす空は、あの日の様に澄み渡っていた。

エピソード（後書き）

一先ず完結です。気が向いたら続きを書くかも知れません。その時は宜しくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4143p/>

魔法使いの始め方

2011年5月27日00時26分発行